

茨城県教育財團文化財調査報告第37集

研究学園都市計画大砂工業団地  
造成事業地内埋蔵文化財調査報告書

大久保 A 遺跡

大久保 B 遺跡

昭和 61 年 3 月

財團法人 茨城県教育財團

研究学園都市計画大砂工業団地  
造成事業地内埋蔵文化財調査報告書

おおくぼ A 遺跡

大久保 B 遺跡

昭和 61 年 3 月

財團法人 茨城県教育財團

# 序

住宅・都市整備公団によって「研究学園都市計画大砂工業団地造成事業」が、茨城県筑波郡大徳町の西部、大砂地区において進められています。この事業地内には、埋蔵文化財包蔵地である大久保A遺跡・大久保B遺跡が確認されています。

財團法人茨城県教育財団は、住宅・都市整備公団と発掘調査事業についての委託契約を結び、昭和60年8月から昭和60年12月まで大久保A遺跡・大久保B遺跡の発掘調査を実施いたしました。

本書は、昭和61年1月から出土品等の整理を実施した大久保A遺跡・大久保B遺跡の発掘調査の成果を収録したものであります。

本書が、学術的な資料としてはもとより、郷土の歴史の理解を深め、教育・文化の向上の一助としてより多くの方々に活用されることを希望いたします。

なお、発掘調査及び整理を進めるにあたり、住宅・都市整備公団、茨城県教育委員会をはじめ、関係各機関及び関係各位から御指導・御協力いただいたことに衷心より感謝の意を表します。

昭和61年3月

財團法人 茨城県教育財団

理事長 竹内藤男

## 例　　言

- 1 本書は、住宅・都市整備公団の委託により、財団法人茨城県教育財團が、昭和60年度に実施した筑波郡大穂町大字大砂に所在する大久保A遺跡、大久保B遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 大久保A遺跡、大久保B遺跡の調査・整理に関する当教育財團の組織は、次のとおりである。

理　事　長	竹内 藤男	
副 理 事 長	川又友三郎	
常 務 理 事	萩原藤之助	
事 務 局 長	堀井 昭生	
調 査 課 長	青木 義大	
企 画 班 長	北鼎 健	
企 画 主任調査員	加藤 雅美	
管 理 主 事	田所多佳男	
管 理 ハン	大曾根 徹	
管 理 ハン	山崎 初雄	
調 査 第 一 班 長	安藤 幸重	
調 査 第 一 主任調査員	柴 正	昭和60年度調査・整理・執筆
調 査 第 一 ハン	人見 晓朗	昭和60年度調査
調 査 班 長	高村 勇	昭和60年度調査
整 理 班 長	石井 稔	

- 3 本書は、発掘担当者の協力を得て、柴 正が整理・執筆・編集を担当した。
- 4 本書の作成及び発掘調査に際して、筑波大学講師池田宏氏から遺跡内の地層について御指導をいただいた。
- 5 本書に使用した記号については、第3章、第1節の2、遺構・遺物の記載方法を参照されたい。
- 6 塚は、実数は15基であったが、最初の図面作成時に、塚状遺構と想定されたもの全てに番号を付し、その塚番号を使用して調査を進めたため、塚に15番よりも大きな号数が付されているものもある。
- 7 発掘調査及び整理等に際して、御指導、御協力を賜った関係機関、各位に深く感謝の意を表します。

# 目 次

## 序

## 例 言

第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査方法	1
1 調査区設定	1
2 基本層序の検討	2
3 遺構確認	3
4 遺構調査	3
第3節 調査経過	4
第2章 位置と環境	6
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	10
第3章 大久保A遺跡	11
第1節 遺跡の概要と遺構・遺物の記載方法	11
1 遺跡の概要	11
2 遺構・遺物の記載方法	11
第2節 塚状遺構と出土遺物	13
1 塚状遺構	13
2 塚状遺構出土遺物	36
3 その他の遺物	37
第3節 まとめ	40
第4章 大久保B遺跡	42
第1節 遺跡の概要と遺構・遺物の記載方法	42
1 遺跡の概要	42
2 遺構・遺物の記載方法	42
第2節 愛宕塚と出土遺物	42
1 愛宕塚	42
2 愛宕塚出土遺物	43

3 その他の遺物	48
第3節 まとめ	49
終 章 むすび	49

## 挿 図 目 次

第 1 図 調査区呼称方法概念図	2	第 14 図 第12・14・16号塚状遺構	
第 2 図 大久保A遺跡土層柱状図	2		土層断面図
第 3 図 大久保B遺跡土層柱状図	3	第 15 図 第17・21号塚状遺構平面図	29
第 4 図 大久保A・B遺跡周辺図	7	第 16 図 第17・21号塚状遺構土層断面図	30~31
第 5 図 大久保A・B遺跡周辺の 遺跡位置図	8~9	第 17 図 第23・24・25号塚状遺構平面図	33
		第 18 図 第23・24・25号塚状遺構	
第 6 図 大久保A遺跡全体図	14		土層断面図
第 7 図 第1・4号塚状遺構平面図	15	第 1 号土坑平面図・土層断面図	34~35
第 8 図 第1・4号塚状遺構土層断面図	16~17	第 19 図 大久保A遺跡内出土遺物拓影図	38
第 9 図 第5・6号塚状遺構平面図	19	第 20 図 第1号塚状遺構出土遺物実測図	39
第 10 図 第5・6号塚状遺構土層断面図	20~21	第 21 国 大久保B遺跡全体図	44
第 11 国 第7・9・10号塚状遺構平面図	22	第 22 国 愛宕塚平面図	45
第 12 国 第7・9・10号塚状遺構 土層断面図	23~24	第 23 国 愛宕塚土層断面図	
		出土遺物実測図	46~47
第 13 国 第12・14・16号塚状遺構平面図	26	第 24 国 大久保B遺跡内出土遺物拓影図	48

## 写 真 目 次

P L 1	大久保A遺跡発掘前全景	P L 5	第6号塚状遺構発掘前全景
	大久保B遺跡発掘前全景		第6号塚状遺構土層断面
P L 2	第1号塚状遺構発掘前全景	P L 6	第7号塚状遺構発掘前全景
	第1号塚状遺構土層断面		第7号塚状遺構土層断面
P L 3	第4号塚状遺構発掘前全景	P L 7	第9号塚状遺構発掘前全景
	第4号塚状遺構土層断面		第9号塚状遺構土層断面
P L 4	第5号塚状遺構発掘前全景	P L 8	第10号塚状遺構発掘前全景
	第5号塚状遺構土層断面		第10号塚状遺構土層断面

P.L.9	第12号塚状遺構発掘前全景 第12号塚状遺構土層断面	P.L.15	第21号塚状遺構発掘前全景 第24号塚状遺構土層断面
P.L.10	第14号塚状遺構発掘前全景 第14号塚状遺構土層断面	P.L.16	第25号塚状遺構発掘前全景 第25号塚状遺構土層断面
P.L.11	第16号塚状遺構発掘前全景 第16号塚状遺構土層断面	P.L.17	第1号土坑土層断面 第1号土坑完掘
P.L.12	第17号塚状遺構発掘前全景 第17号塚状遺構土層断面	P.L.18	愛宕塚発掘前全景 愛宕塚土層断面
P.L.13	第21号塚状遺構発掘前全景 第21号塚状遺構土層断面	P.L.19	大久保A遺跡第1号塚状遺構出土遺物 大久保B遺跡愛宕塚出土遺物
P.L.14	第23号塚状遺構発掘前全景 第23号塚状遺構土層断面	P.L.20	大砂八幡神社境内に移転した橋脚 大砂八幡神社境内に移転した祠

# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経過

住宅・都市整備公団研究学園都市開発局（以下、住宅・都市整備公団と言う）は、筑波研究学園都市と直結して、科学技術の頭脳を蓄積した縁に囲まれた次世代の工業団地と、最新の都市機能を備え充実した生活環境を整えた新しい町づくりのために、筑波研究学園都市の周辺開発整備計画地区北部に位置する茨城県大穂町大字大砂地区に工業団地の造成事業（約60ha）を計画し、この事業の名を大砂工業団地造成事業とした。

この開発を進めるにあたり、昭和59年4月に住宅・都市整備公団は、茨城県企画部地域整備第二課を通じ、開発候補地区に於ける埋蔵文化財包蔵地の有無について照会を依頼した。茨城県教育委員会は、県企画地域整備第二課の要請により、開発予定地区の埋蔵文化財包蔵地の有無を確認するため、昭和59年5月29日・30日の両日にわたり表面観察による分布調査を実施し、その結果について昭和59年10月、住宅・都市整備公団に回答した。昭和60年3月、茨城県教育委員会と住宅・都市整備公団は、開発予定地内の埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについての協議を行った。住宅・都市整備公団は、県教育委員会に昭和60年5月20日、開発地域内の埋蔵文化財の確認調査について再度依頼をした。県教育委員会は、埋蔵文化財の確認をするため、昭和60年5月27日～29日の間、試掘調査を実施した。その結果、開発地域内に大久保A遺跡・大久保B遺跡の2遺跡が確認された。県教育委員会は、住宅・都市整備公団に昭和60年6月12日付で埋蔵文化財の確認調査について回答をし、住宅・都市整備公団は、県教育委員会に昭和60年6月18日付けて、開発地域内の埋蔵文化財の取り扱いについて協議申し込みをした。6月22日の県教育委員会と住宅・都市整備公団の協議の結果、現状保存は困難であることが確認され、発掘調査による記録保存の措置を講ずることとした。

茨城県教育財團は、県教育委員会の紹介により同年7月、住宅・都市整備公団との間に埋蔵文化財発掘調査の業務委託契約を締結し、昭和60年8月1日から大久保A遺跡（2,644m<sup>2</sup>）、大久保B遺跡（15,337m<sup>2</sup>）の調査を実施することになった。

## 第2節 調査方法

### 1 調査区設定

大久保A遺跡の調査区設定は、日本平面直角座標第IX系、X軸（南北）-16,340m、Y軸（東西）

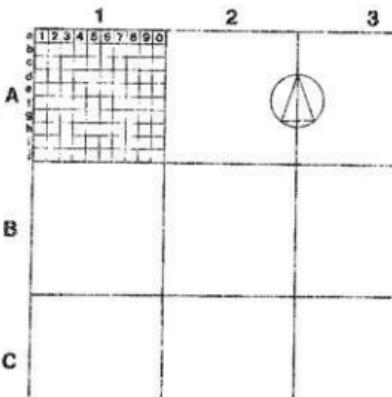
-19,140mの交点を通る軸線を基準にして、東西・南北各々40mずつ平行移動して大調査区を設定した。大調査区の名称は、北から南へ「A」・「B」・「C」……「F」と大文字を付し、西から東へ「1」・「2」・「3」……として、「A 1」区、「B 2」区のように呼称した。なお、塚の調査なので、小調査区までの分割は行わなかった。

大久保B遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第II区系、X軸（南北）-15,930m、Y軸（東西）+18,950mの交点を通る軸線を基準として、東西、南北各々40mずつ平行移動して、A遺跡と同じ方法で大調査区を設定した。

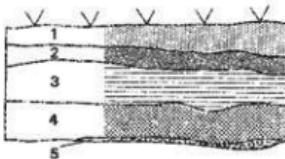
小調査区は、40m四方の大調査区を更に4m四方の小調査区に100分割し、北から南へ「a」・「b」・「c」……「j」、西から東へ「1」・「2」・「3」……「0」と小文字を付した。各小調査区の名称は、大調査区の名称と合せた四文字で「A 2 b 1」区・「B 3 e 7」区のように呼称した。

## 2 基本層序の検討

大久保A遺跡の基本層序（第2図）は第1層が表土層で12~22cmほどの厚さを有し、ローム粒子、炭化物を含む軟らかな暗褐色の土層である。第2層は10cm前後の厚さを有し、ローム粒子を多量に含む粘性のある褐色の土層である。第3層は、30cm前後の厚さを有し、ハードロームブロックを含み处处に硬く縮まっている箇所が見られる暗褐色の土層である。第4層は、24~28cmの厚さを有し、ハードロームブロックを多量に含み、全体的に硬く縮まっている暗褐色の土層である。第5層は、やや粘土が混じっている暗褐色の土層である。

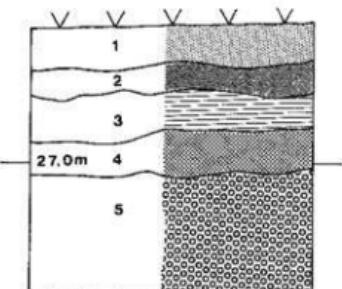


第1図 調査区呼称方法概念図



第2図 大久保A遺跡土層柱状図

大久保B遺跡の基本層序（第3図）は第1層が表土層（耕作土）で24~30cmの厚さを有し、ローム粒子、炭化粒子を含み比較的硬く締まったにぶい黄褐色の土層である。第2層は、8~24cmの厚さを有し、炭化粒子を含むローム質の層で比較的硬く締まった褐色の土層である。第3層は、22~40cmの厚さを有し、ロームブロックを含むハードロームブロックの層で、非常に硬く締まっているにぶい黄褐色の土層である。第4層は、22~34cmの厚さを有し、火山活動の休止時期に堆積したといわれている黒色バンドの層であり、黒褐色で硬く締まりやや粘性がある。第5層は、90cm前後の厚さを有し、ローム質の粘土層で粘性があり、ハードロームブロックが適々に混じった黄褐色の土層である。



第3図 大久保日遺跡土層柱状図

### 3 遺構確認

大久保A遺跡の遺構確認は、遺跡内の雜木や雜草等の上物を除去した後、高さ70cm以上の大・小25基の塚状遺構（以下、塚という）が検出された。塚の調査はローム面まで掘り下げ、塚覆土及び塚下の遺構を確認した。塚帽部にトレンチを入れ、塚に伴う周溝等の有無を確認した。

大久保B遺跡の遺構確認は、発掘調査地域総面積の4分の1をグリッドにより試掘調査を実施し遺構の確認をした。B遺跡内には、塚状に盛土された愛宕塚が所在し、A遺跡の塚状遺構と同じ方法で塚及び塚下の遺構の確認をした。

### 4 遺構調査

塚の調査は、長軸方向とそれに直角に交わる方向に4分割して掘り込む「4分割法」で実施し、地区的名称は、北から時計通りに1区~4区とした。

土層の観察は、色調、含有物、混入物の種類や量及び粘性、吸水性、締まり具合等を観察し、分類の基準とした。色相の判定は、「新版標準土色誌」（小山正忠・竹原秀雄編著、日本色研事業株式会社）を使用して行った。

土坑の調査は、長軸方向で二分して掘り込む「2分割法」で実施した。

遺構や遺物の平面実測は、平板測量を行った。土層断面や塚断面の実測は、標高を用いて水糸を水平にセットし、水糸を基準として実測した。縮尺は20分の1を基準とし、塚の墳丘測量を200分の1で作成した。

遺物は原位置を保ち、出土地点とレベルを遺物出土状況計測表に記録し取り上げた。

図の記録過程は、発掘前全景写真撮影→墳丘測量図作成→土層断面写真撮影→土層断面図作成→遺物出土状況写真撮影→遺物出土状況図作成→遺構の土層断面写真撮影→土層断面図作成→遺構平面図作成→遺構断面図作成の順を基本とした。

図面や写真等に記録できない事項については、調査日誌、調査記録カードに記録した。



### 第3節 調査経過

大久保A遺跡・大久保B遺跡は、昭和60年8月1日に事務所を設置し発掘調査を開始したが、A・B遺跡とも遺構・遺物の出土量が少なかったため、発掘調査は当初の計画よりも早く終了し、昭和60年12月末日をもって調査区域内のすべての調査を終了した。以下、5ヶ月にわたる発掘調査の経過を毎月の前半・後半で記述する。

8月前半 事務所設置、A・B遺跡の調査区確認、椎木の伐開、整理、作業員募集、発掘調査前の遺跡全景写真撮影など発掘調査の準備を進める。

後半 大調査区の基準杭設定、上物除去後A遺跡内に塚状遺構が確認されたので、その平面実測と発掘前全景写真撮影を行う。

9月前半 A道路北部エリア境内に位置する第1・5・6・9号塚から発掘調査を開始する。第1号塚の1区から宝篋印塔の相輪部が出土する。

後半 第1号塚の1区に第1号土坑が確認され、その内部から小形の擂鉢1個が出土する。次いで塚頂上付近の直徑約3mの範囲の覆土から古銭8枚が出土する。第7・10・12・14号塚の発掘調査を始める。

10月前半 第4・16・17・21・23・24号塚の発掘調査と平行して、大久保A遺跡の基本層序確認

のため、テストピットの掘り下げと土層断面図の作成をする。

後半 A遺跡内の塚状遺構の補足調査を行う。

11月前半 1日からは大久保B遺跡の発掘準備を進める。器材・器具その他テントなどを移動する。大調査区杭打ち作業、小調査区杭打ち作業を行う。グリッド発掘による16分の1の遺構確認作業を始める。

後半 グリッド発掘による8分の1の遺構確認作業と平行して愛宕塚の2区・4区の盛土除去を進める。周溝の有無を確認するため塚裾部2区南側・4区西側に巾約50cm、長さ10mのトレンチによる発掘を行う。

12月前半 グリッド発掘による4分の1の遺構確認作業、B遺跡の基本層序確認のため、テストピットの掘り下げと土層断面図の作成をする。愛宕塚の土層断面図の作成、A遺跡の伐開・清掃作業の遅れていた第25号塚の調査を開始する。

後半 第25号塚の補足調査を行う。B遺跡は発掘調査総面積の4分の1までグリッド発掘を実施し、遺構の有無を確認したが、遺構とみなされるものは確認されなかったため、12月26日をもって大久保B遺跡のすべての調査を終了した。



作業風景

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

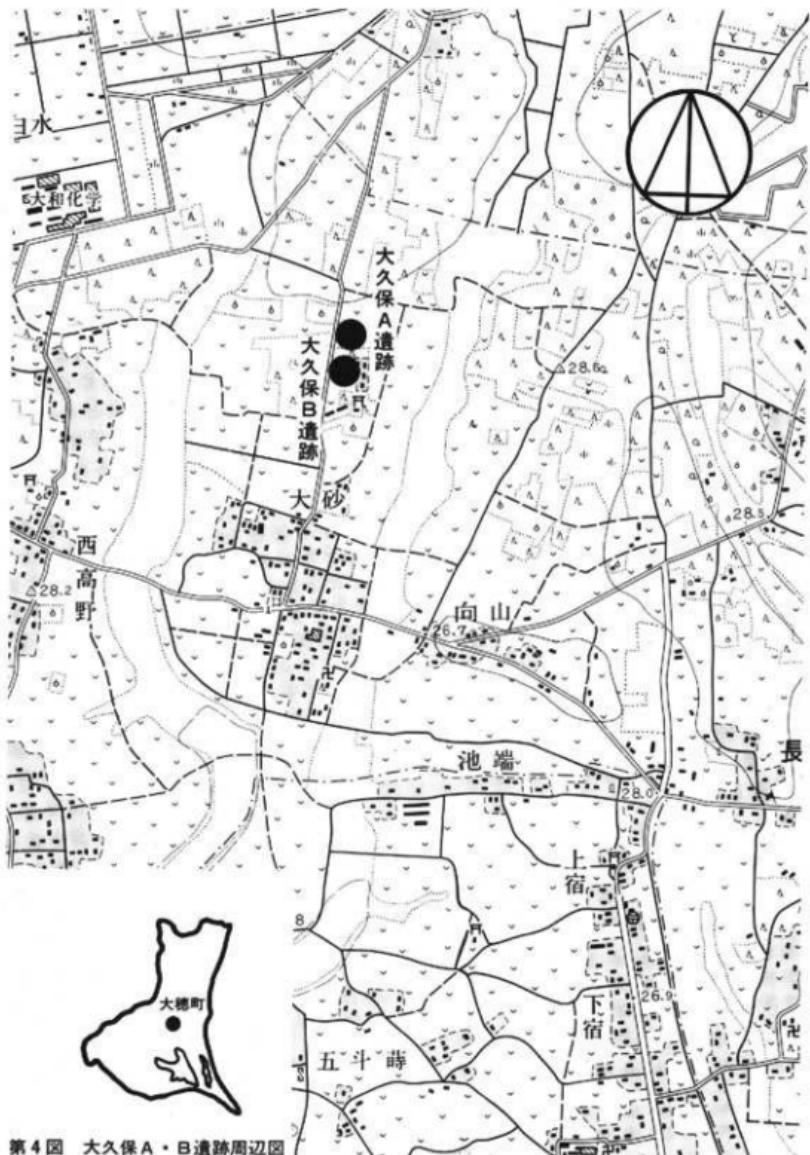
大久保A遺跡・大久保B遺跡は、大穂町大字大砂字大久保210番地ほかに所在している。両遺跡の所在する大穂町は、関東構造盆地の北東部にあたる茨城県の南西部、筑波・稲敷台地の北西に位置する。筑波・稲敷台地は、桜川低地と小貝川低地との間にあり、東は霞ヶ浦、南は利根川下流の低地にくぎられた比較的平坦な広い台地である。

小貝川は、栃木県に発し、大穂町の西側の町境を流下し、北相馬郡利根町で利根川と合流している。桜川は、西茨城郡岩瀬町に発し、大穂町の東側の町境を流下し、土浦市から霞ヶ浦へと注いでいる。

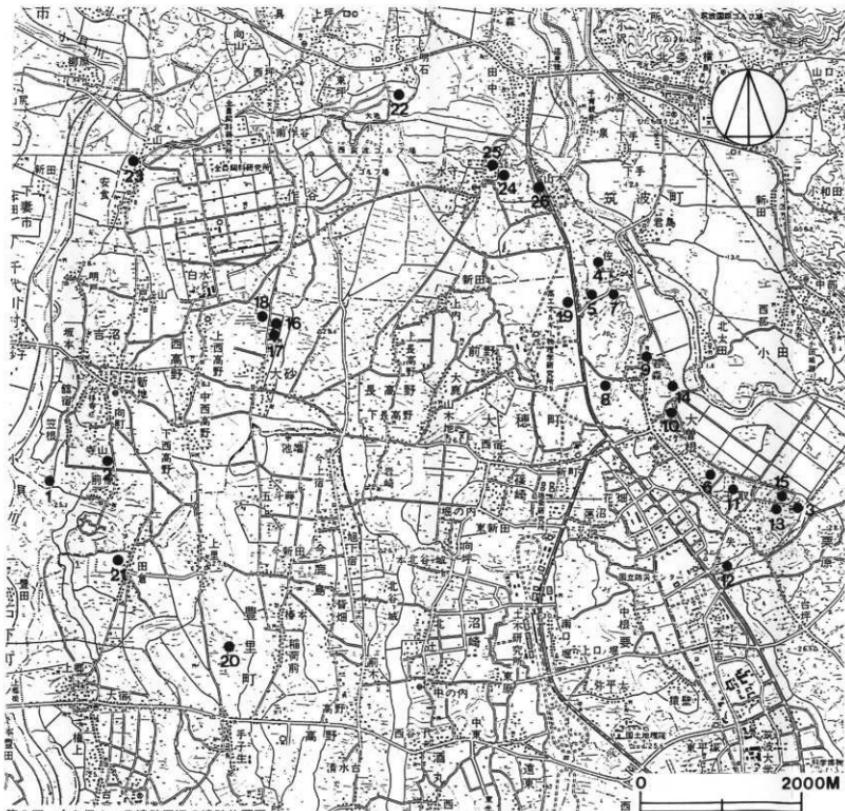
現在の大穂町は、昭和28年4月に町制施行により誕生し、同年6月に栗原村、蓮沼、同30年に旭村、要、同31年に吉沼の大部分と合併し、現在の大穂町が成立した。当町は、北は筑波町、南は豊里町、谷田部町を境とし、南北6.5kmほどあり、東は、桜村、筑波町、西は千代川村、石下町を境とし、東西10.5kmに及び、面積は34.01km<sup>2</sup>である。

大穂町は、筑波研究学園都市六ヶ町村の中では北部に位置しており、当町の主産業は、農業である。時代の推移と共に農業の内容も変わり、現在では芝の栽培が盛んである。また、昔は手造り帯の産地として知られていたが、最近では、筑波研究学園都市の誕生により、文化や産業の面でも急激に発展しつつある。町内には文部省や建設省等の研究施設として、上原に高エネルギー物理学研究所、立原に国立教育会館筑波分館、建築研究所、蓮沼に電々公社建設技術開発センター、その他、土木研究所、海洋環境技術研究所等が設置されている。当町には、これらの研究機関を結ぶ交通網が発達しており、町のほぼ中央部を東西に県道宗道・今鹿鳴線、主要地方道大穂・千代田線が通り、大穂町役場を基点として、東方約0.2kmに県道土浦・筑波線(学園東大通り)が北方から南東方に通り、西方0.1kmに国道408号線(学園西大通り)が北方から南方に走っており、南東3.3kmには筑波大学が所在し、6.5kmで土浦市に至り、北々東4.5kmで筑波山に至る。

両遺跡は、大穂町役場から直線にして西方3.9km離れた同町の西部寄りに所在し、遺跡の西方1.2kmには西谷田川が流下し、南東2.5kmには東谷田川が流下し、西谷田川と共に竜ヶ崎市の牛久沼に流れ込んでいる。大久保A遺跡・大久保B遺跡は、この両河川にそって舌状にのびる台地のつけねの西側、台地標高28m程の縁辺部に位置している。遺跡の東西には、谷津が樹枝状に入り込み、水田となっている。水田との比高は1.5m程である。なお、遺跡の現況は雑種地及び雑木林であり、大久保B遺跡は山林及び畠である。



第4図 大久保A・B遺跡周辺図



第5図 大久保A・B遺跡周辺の遺跡位置図

大久保A遺跡・大久保B遺跡周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	遺跡の時代			
			先土器	縄文	弥生	古墳
1	熊野夫婦塚古墳	古 墳				○
2	瓦塚遺跡	包 藏 地			○	
3	玉取古墳群	古 墳 群				○
4	佐 古墳群	古 墳 群				○
5	佐 遺跡	包 藏 地				○
6	吹上貝塚	貝 塚			○	
7	若森西遺跡	包 藏 地			○	
8	若森池西遺跡	包 藏 地			○	
9	谷津遺跡	包 藏 地			○	
10	大曾根A遺跡	包 藏 地			○	
11	大曾根B遺跡	包 藏 地			○	
12	寺山遺跡	包 藏 地			○	
13	玉取遺跡	包 藏 地				○
14	松原古墳群	古 墳 群				○
15	千手堂古墳	古 墳				○
16	大久保A遺跡	包 藏 地				○
17	大久保B遺跡	包 藏 地				○
18	大砂遺跡	包 藏 地			○	
19	前野遺跡	包 藏 地			○	
20	大境遺跡	包 藏 地			○	
21	田倉遺跡	包 藏 地			○	
22	明石南遺跡	包 藏 地				○
23	安食遺跡	包 藏 地				○
24	水守遺跡	包 藏 地				○
25	水守古墳群	古 墳 群				○
26	山木古墳群	古 墳 群				○

## 第2節 歴史的環境

大久保A遺跡・大久保B遺跡の所在する大穂町には、現在、先土器時代から古墳時代までの遺跡が17カ所確認されている。昭和60年度に大砂工業団地造成事業に伴い、大久保A遺跡・大久保B遺跡が確認され、合計19遺跡となっている。この大穂町に所在する大久保A遺跡・大久保B遺跡を中心にして歴史的環境を、近隣の筑波町、豊里町を含めて時代ごとに述べることにする。

先土器時代の遺跡は、大穂町に大砂遺跡(18)・前野遺跡(19)があり岡遺跡とも尖頭器が出土している。縄文時代の遺跡は、前期から晩期まで確認されており、前期の遺跡としては、大久保A遺跡を基点として、南方6.5kmに位置する寺山遺跡(12)があり黒浜式の土器片が確認されている。6.3kmに大曾根B遺跡(11)、東方5.2kmに大曾根A遺跡(10)が所在する。南方4.5kmには、昭和59年4月から昭和60年7月にかけて茨城県教育財團により発掘調査が実施された豊里町の大境遺跡(20)が所在し、大境遺跡では、前期前葉の植房式期の住居跡が、1軒検出されている。中期の遺跡は、上記にあげた寺山遺跡、大曾根A遺跡、大曾根B遺跡を始め比較的多く、南西方2.7kmに瓦塚遺跡(2)、南東方5.9kmに吹上貝塚(6)があり、加曾利E式期の土器片が確認されている。また、東4.3kmに若森池西遺跡(8)、4.5kmに若森西遺跡(7)、4.8kmに谷津遺跡(9)、南西方3.5kmに田倉遺跡(21)、と大境遺跡が所在する。大境遺跡からは、中期中葉の阿玉台式期の住居跡が20軒・中期後葉の加曾利E式期の住居跡が1軒検出されている。後期の遺跡は、上記にあげた瓦塚遺跡・吹上貝塚から安行II式の土器片が確認され、若森池西遺跡・田倉遺跡からは堀ノ内・安行III a b・大洞B式の土器片が確認されている。晩期の遺跡としては、田倉遺跡があげられる。弥生時代の遺跡はまだ確認されていない。

古墳時代の遺跡は、南東方7.0kmに玉取遺跡(13)があり、地表面には土師器片が散在している。また、玉取古墳群(3)には、4基の円墳が確認されている。東方4.3kmには佐古墳群(4)、5.3kmには松原古墳群(14)が所在しており、地表面には土師器片・須恵器片が散在している。南西方3.5kmには熊野大婦塚古墳(1)があり、2基の円墳が確認されている。南東7.0kmには千手堂古墳(15)があり、前方後円墳1基が所在する。北東2.7kmには筑波町の明石南遺跡(22)・北西方2.5kmに安食遺跡(23)・北東方3.5kmに水守遺跡(24)・水守古墳群(25)・北東3.7kmに山木古墳群(26)が所在する。

歴史時代は、大境遺跡があり平安時代の住居跡が2軒検出されている。以上が、大久保A遺跡・大久保B遺跡の周辺に所在する遺跡である。

# 第3章 大久保A遺跡

## 第1節 遺跡の概要と遺構・遺物の記載方法

### 1 遺跡の概要

大久保A遺跡は、茨城郡大穂町大字大砂字大久保210番地はか5筆に所在し、調査対象面積は2,644m<sup>2</sup>である。遺跡は、低湿地に面した標高28mの台地縁辺部に位置し、低湿地との比高は1.5m程度である。現況は塚及び雜木林である。

遺跡内の全域からは、高さ70cm以上の塚状遺構、大・小15基が確認され発掘調査を実施した。いずれの塚からも、周溝や埴輪、主体部と思われるものは検出されなかった。また、塚に伴うと思われる施設も検出されなかった。塚とは直接的に関係のない遺物として、調査区内から縄文土器5片が出上したが、縄文土器片に伴う遺構は確認されなかった。

### 2 遺構・遺物の記載方法

#### (1) 遺構の記載方法

本書における遺構の記載方法は、下記の要領で統一した。

##### ① 使用記号

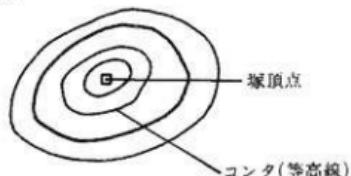
塚—TM 上坑—SK 覆土—X

##### ② 土層の分類

土層断面における含有物の面積割合は、およそ30%以上を多量、20%前後を中量、10%以下を少量、3%以下を微量とした。擾乱を受けている土層は、挿図の中に「擾乱」と表示した。

##### ③ 遺構実測図の作成方法と掲載方法

〈塚〉



〈土坑〉



塚の平面は、縮尺50分の1の図をトレースし版組した。それを2分の1に縮少して掲載した。

塚の土層断面は、縮尺20分の1の原図を2分の1に縮少してトレース版組し、それをさらに2分の1に縮少して掲載した。

土坑は、縮尺20分の1の原図を2倍に拡大してトレース版組し、それを2分の1に縮小して掲載した。

レベルの掲載は、塚の上層断面は西東・南北と塚の形状に応じてレベル差を設けて掲載した。単位はmである。

## (2) 遺物の記載方法

本跡から出土した遺物については、実測図・拓影図・写真などにより掲載し、説明を加えた。古錢については、腐食し形が不鮮明なもの等は、掲載から省いた。

### ① 使用記号

実測土器 P 拓本土器——TP

### ② 遺物実測図の作成方法

#### ア 土器

拓影図の断面は、右側におくことを原則とした。

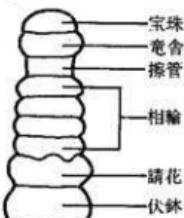
#### イ 石製品

石製品は、正面図・側面図・断面図をあらわすことを基本とした。

### ③ 遺物実測図の掲載方法

破損は破線……で表現した。凹みの範囲は2線——で表現した。

### ④ 宝塚印塔の相輪部の名称（大久保A遺跡出土）は、上記図のようにした。



大久保A・B遺跡塚土層解説表

番号	土色名	色	相	明度/彩度	含	有	物
1	褐色	色	Hue7.5YR	% % %	a	ローム粒子混入	
2	黒褐色	色	"	% % %	b	ローム小ブロック混入	
3	暗褐色	色	"	%	c	ローム中ブロック混入	
4	暗褐色	色	"	% %	d	焼土粒子混入	
5	黒	色	"	%	e	炭化粒子混入	
6	褐色	色	Hue10YR	% %	f	炭化物混入	
7	黒褐色	色	"	% % %	g	砂混入	
8	暗褐色	色	"	% %	h	黒色土混入	
9	にぶい黄褐色	色	"	% %	i	腐植土混入	
10	黄褐色	色	"	% %	j	ローム層	

\*含有物の量は次の記号を使用した。多量…, 中量…, 小量…

## 第2節 塚状遺構と出土遺物

### 1 塚状遺構

#### 第1号塚状遺構（第7・8図）

本跡は、大久保A遺跡の北東部の隅に所在し、塚の形状は、楕円形を呈し、長径38.0m、短径18.6m、塚高0.94mを有し、長径方向はN-82°-Wである。塚頂は東側に在り、裾部は特に西側に張り出し、凸面を持ちながらだらかに傾斜している。塚を形成する基本土層は5層である。

第1層は、塚の表土全面を覆い、腐植土及び砂粒を含み、粘性や縮まりが無く、暗褐色を呈している。第2・3層は、共にローム粒子を微量、砂粒を多量に含み、粘性なく暗褐色を呈している。

第4層は、黒色をしている土層で、黒褐色ハードブロックを中量含み、縮まりを有する。第5層は、ロームブロックやハードロームブロックを少量含み、粘性及び縮まりを有する褐色の土層である。

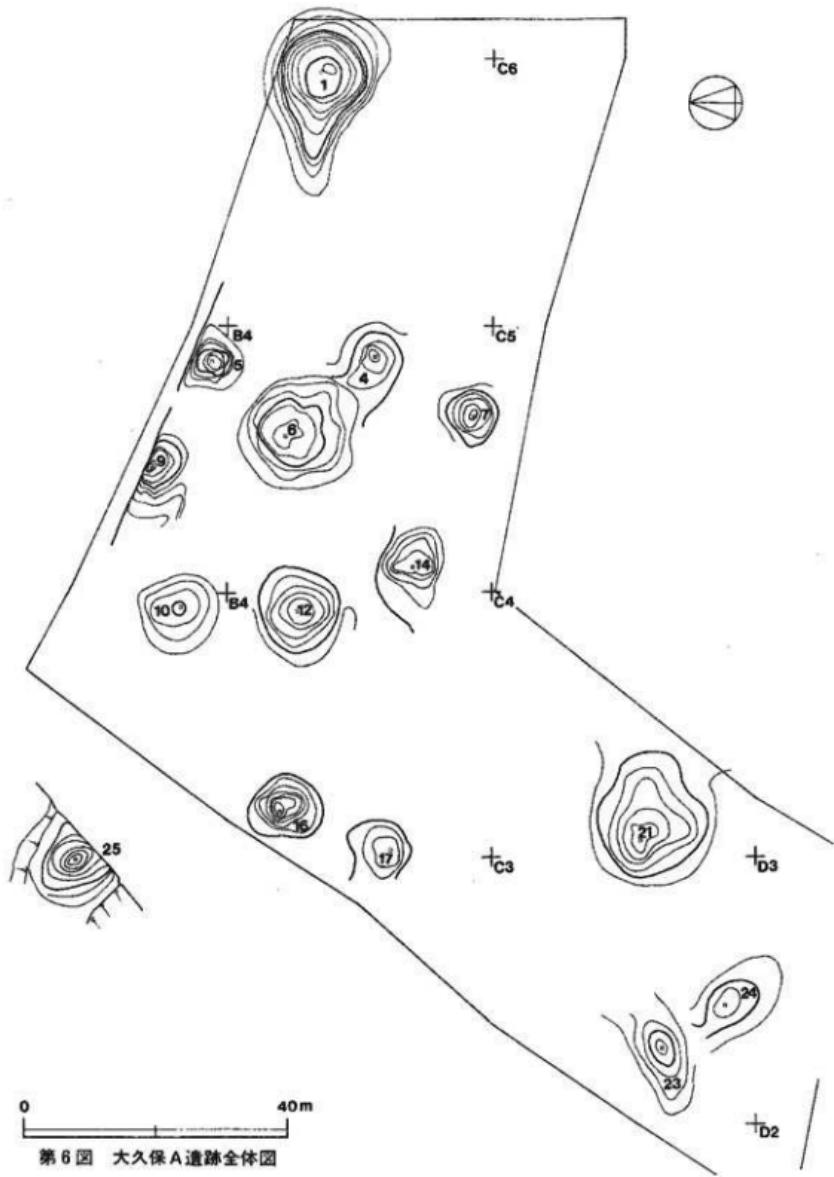
出土遺物は、塚の北東部の第4層から第5層にかけて、花崗岩で造られた宝鏡印塔の軸輪部が、上部は南東方向、下部は北西を向き横位の状態で出土している。同じく第5層からは、石質を同じくした四角形を呈する宝鏡印塔の基礎部の一部と思われる石片が、東西方向に横位の状態で出土している。その他、石片2個が出土している。北西部の第5層からも宝鏡印塔の一部と思われる同質の石片が出土している。これらの出土遺物の上層は全て擾乱されており、擾乱により埋したものと思われる。塚頂から直径3.0m以内の南東及び南西部の擾乱層からは、江戸時代の寛永通寶が、第1～3層から6枚、第5層から2枚出土している。

塚の北東部は、直徑約120cmの範囲にわたり擾乱坑が掘られており、その下部にあたるローム面から、長径68.0cm、短径44.0cm、深さ18.0cm、長径方向N-35°-Wの橢円形を呈する第1号土坑（第18図）が検出されている。形状は、全体的に皿状を呈し、底面がほぼ平坦で、壁はやや外傾して立ち上がりっている。遺物は、覆土上層の北側から擂鉢が上向きの状態で出土している。土層は4層から成り、それぞれの土層からロームブロックや黒色ハード小ブロック等が混入していることから、本土坑は、人為的に埋廻されたものと思われる。

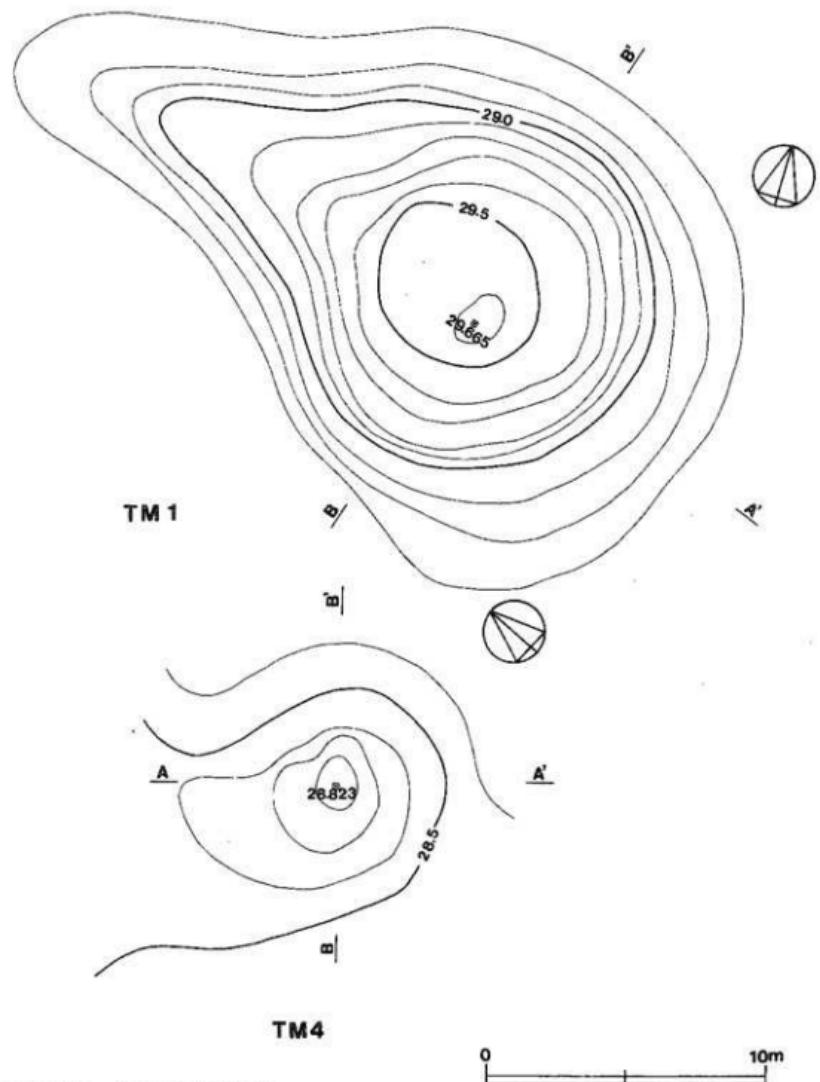
塚覆土及び裾部からの遺構は検出されなかった。

#### 第4号塚状遺構（第7・8図）

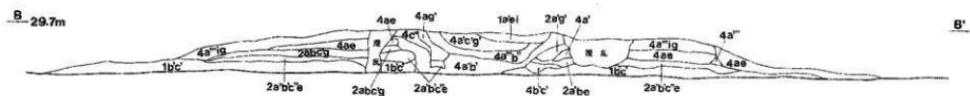
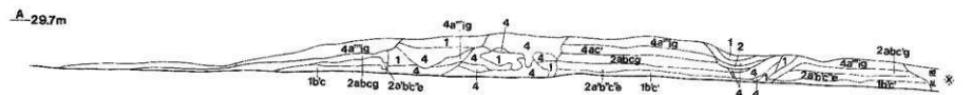
本跡は、当遺跡の北側中央部、B4区に位置し、裾部は西側にやや張り出しており、平面形は橢円形を呈している。規模は長径12.2m、短径11.0m、塚高0.5mを有し、長径方向はN-45°-Wである。土層は12層から成り、塚の中央部に土層が集まり、全体的にローム粒子、ロームブロックを含み硬く縮まっている。塚に伴う施設や遺物は検出されなかった。



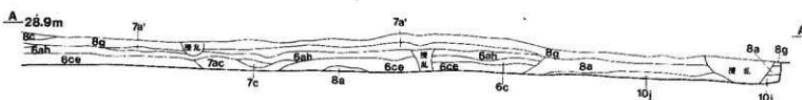
第6図 大久保A遺跡全体図



第7図 第1・4号塚状造構平面図



TM1



TM4

第8圖 第1・4号據狀遺標土層斷面圖

### 第5号塚状遺構（第9・10図）

本跡は、当遺跡の北部、A4区に位置し、北側約4分の1が削り取られ、農道になっており、平面形は楕円形を呈するものと考えられる。規模は長径12.0m、短径11.0m、塚高0.75mを有し、長径方向はN-30°-Wである。上層は7層から成り、中央部及び西側裾部に表面1.40m、深さ0.45m～0.6mの擾乱跡があり、第1・2層は砂粒、ローム粒子を含み締まりなくさらさらしている。第3層は黒色をした硬い屑である。第4～7層はロームブロック、ハードロームブロックを含み、粘性及び締まりがある。塚に伴う施設や遺物は検出されなかった。

### 第6号塚状遺構（第9・10図）

本跡は、当遺跡の北側中央部、B4区に位置し、塚高が一番高い塚であり、南東方向になだらかに傾斜し張り出しており、平面形は楕円形を呈している。規模は長径20.4m、短径19.4m、塚高1.0mを有し、長径方向はN-31°-Wである。土層は7層から成り、第1層は他の層に比較して厚いが、全体の層序は平行帶である。第4層は黒色で黒色ハードブロックを多量に含み部分的に硬い面と、軟らかい面がある。第5～7層はロームブロックを含み粘性がある。塚に伴う施設や遺物は検出されなかった。

### 第7号塚状遺構（第11・12図）

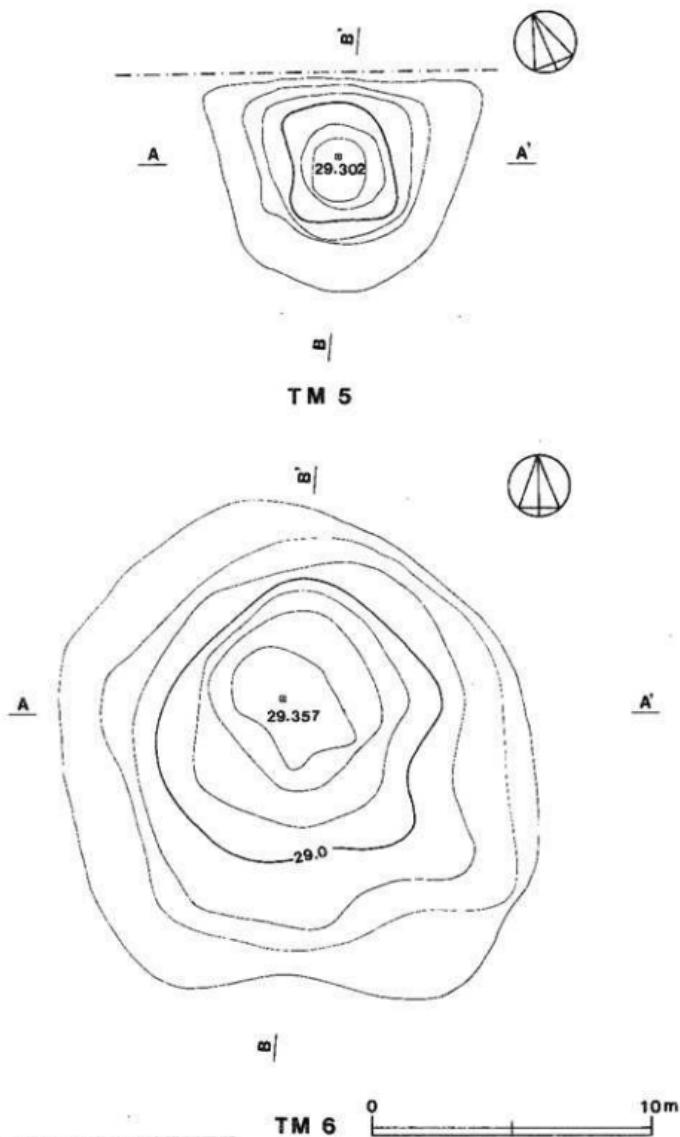
本跡は、当遺跡の北側中央部、B4区に位置し、平面形は楕円形を呈している。規模は長径12.6m、短径10.2m、塚高約0.6mを有し、長径方向はN-82°-Wである。土層は6層から成り、中央部及び南部に擾乱跡が見られる。塚に伴う施設や遺物は検出されなかった。

### 第9号塚状遺構（第11・12図）

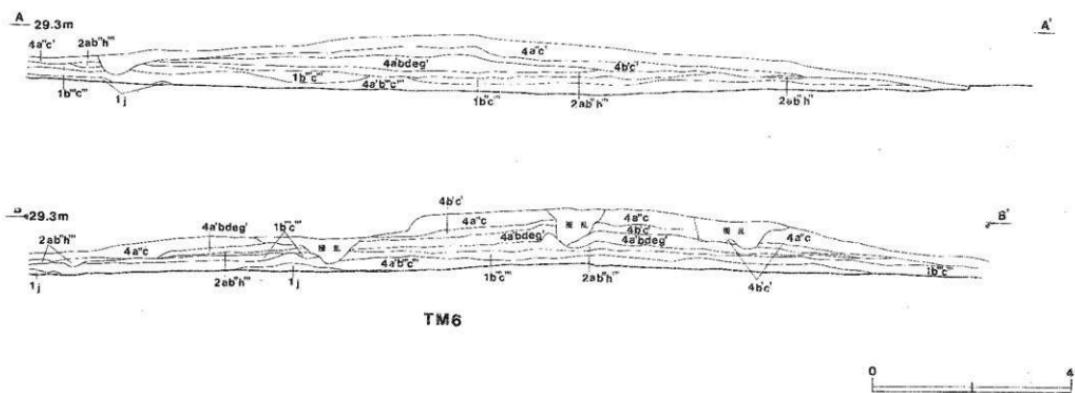
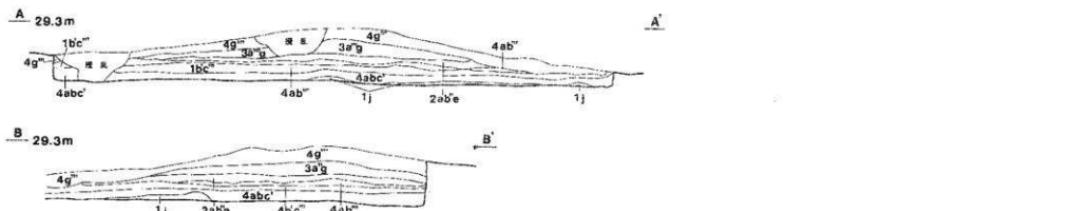
本跡は、当遺跡の北側、A4区に位置し、北側の約3分の1が削り取られ、農道になっている。塚頂から南東方向になだらかに張り出し、平面形は楕円形を呈するものと考えられる。規模は長径14.0m、短径6.0m、塚高約0.6mを有し、長径方向はN-62°-Wである。上層は7層から成り、層序は平行であり、第1・2層は砂粒、ロームブロックを含み軟らかい。第3層は黒色で硬くなっている。第4～7層はロームブロックを含み粘性及び締まりがある。

### 第10号塚状遺構（第11・12図）

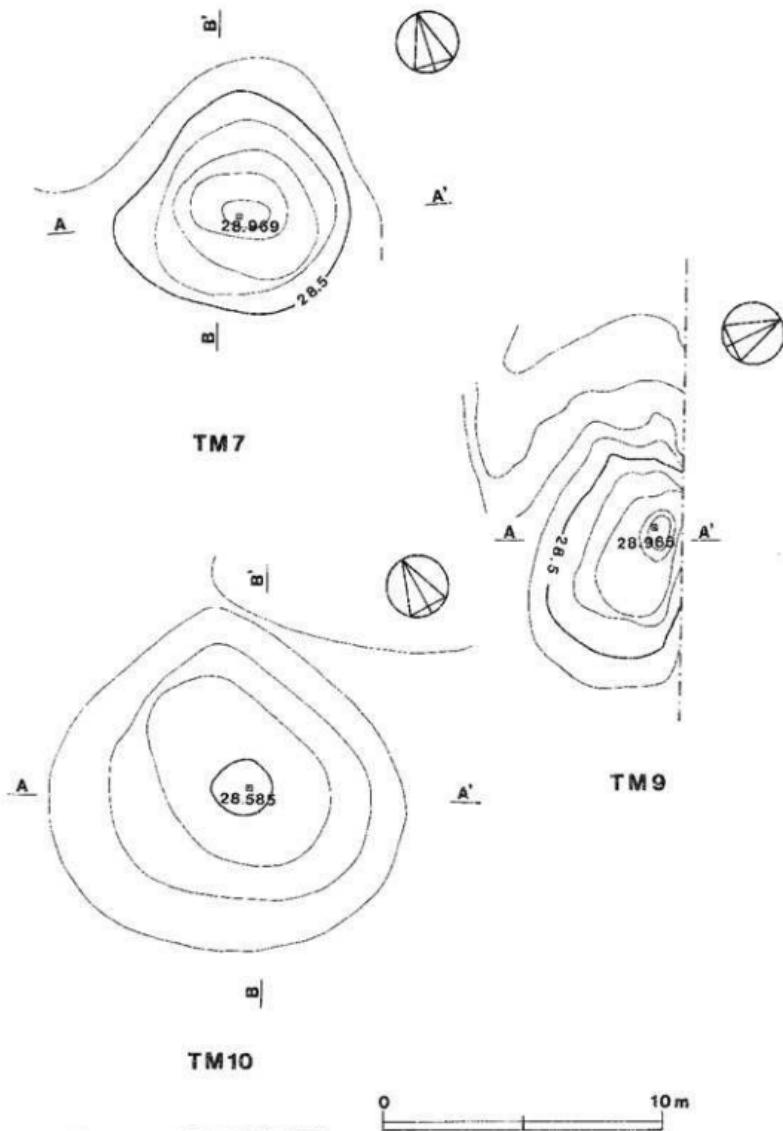
本跡は、当遺跡の北部、A3区に位置し、平面形は楕円形を呈し、規模は長径14.8m、短径14.0m、塚高0.4mを有し、長径方向はN-60°-Wである。平面形の割には塚高が低く土層は5層から成り、平行した薄い層である。第3層が厚く、ハードブロック、炭化粒子を含み締まっている。



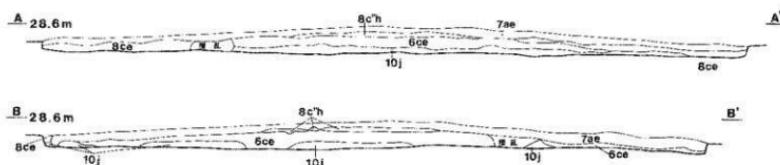
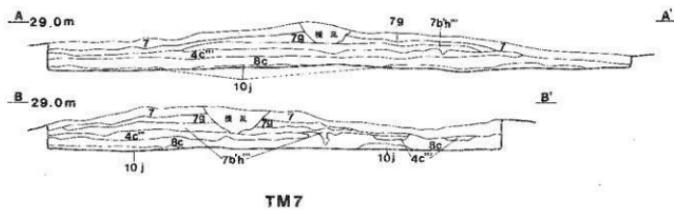
第9図 第5・6号塚状遺構平面図



第10図 第5・6号状造横土層断面図



第11図 第7・9・10号塚状造構平面図



第12図 第7・9・10号 sondage borehole sections

#### 第12号塚状遺構（第13・14図）

本跡は、当遺跡の中央部、B 3 区に位置し、平面形は、ほぼ円形を呈している。規模は長径 16.4m、短径 16.2m、塚高約 0.6m を有し、長径方向は N-89°-E である。土層は 7 層から成り、第 1・2 層は砂粒を含み軟らかく、第 3 層は黒色を有し、硬く縮まっている。第 4・5・6 層も硬く縮まっている。その他塚に伴う施設や遺物は検出されなかった。

#### 第14号塚状遺構（第13・14図）

本跡は、当遺跡の北側中央部、B 4 区に位置し、平面形は、不整楕円形を呈している。規模は長径 14.8m、短径 12.0m、塚高約 0.6m を有し、長径方向は N-84°-E である。土層は 7 層から成り、第 1・2 層は砂粒を含み軟らかく、第 3 層は黒色を有し硬く、第 4～7 層は褐色を有しやや硬い。その他塚に伴う施設や遺物は検出されなかった。

#### 第16号塚状遺構（第13・14図）

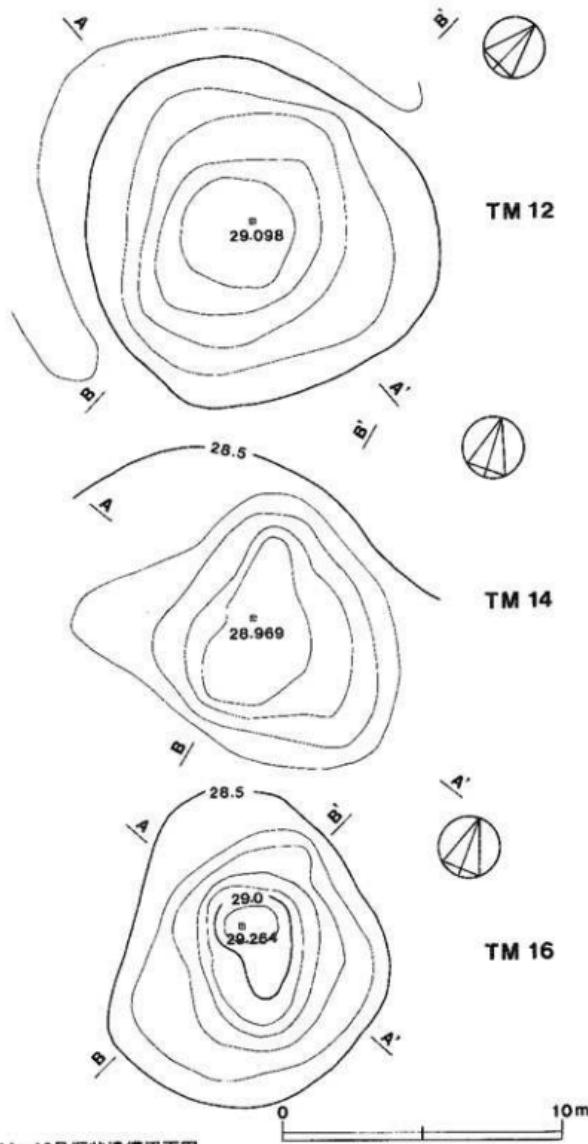
本跡は、当遺跡の中央部、B 3 区に位置し、南側にやや張り出しており、平面形はほぼ円形を呈している。規模は長径 11.0m、短径 10.0m、塚高約 0.8m を有している。土層は 7 層から成り、第 1 層はローム粒子、砂粒を含み層が厚く、黒色を有する第 3 層が特に鮮明に表われている。塚の北西部からは縄文土器 3 片が出土しているが、直接、塚に伴う遺物とは考えられない。また、本塚に伴う施設は検出されなかった。

#### 第17号塚状遺構（第15・16図）

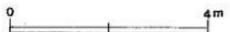
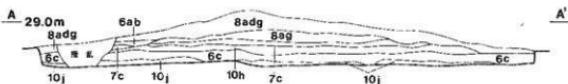
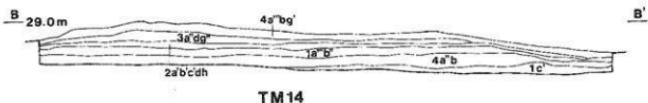
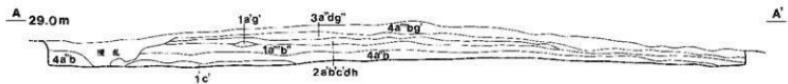
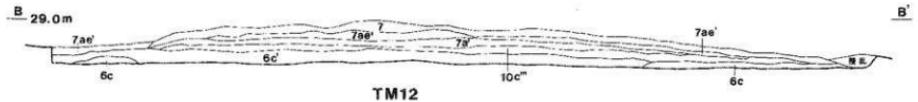
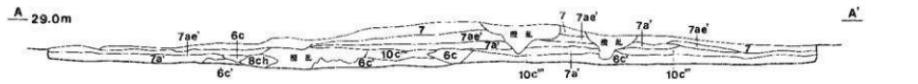
本跡は、当遺跡の中央部、B 3 区に位置し、裾部は北側になだらかに張り出しており、平面形は楕円形を呈している。規模は長径 18.0m、短径 16.0m、塚高 0.5m を有し、長径方向は N-13°-E である。土層は 7 層から成り、全体的に搅乱が多く見られる。その他塚に伴う施設や遺物は検出されなかった。

#### 第21号塚状遺構（第15・16図）

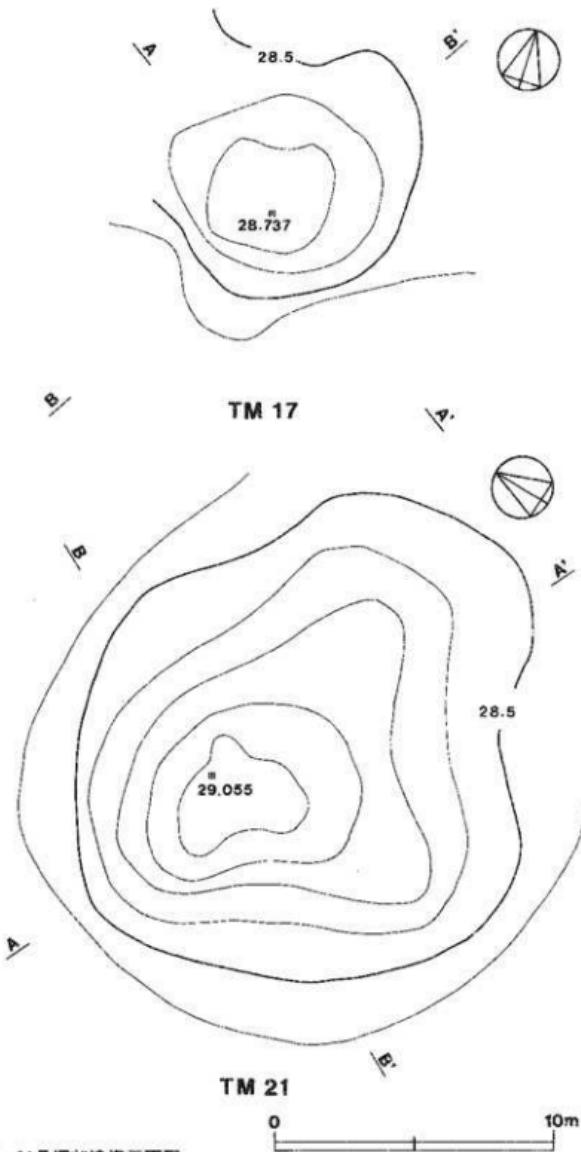
本跡は、当遺跡の南部、C 3 |X| に位置し、東側になだらかに張り出しており、平面形は楕円形を呈している。規模は長径 22.4m、短径 20.0m、塚高 0.6m を有し、長径方向は N-71°-W である。土層は 5 層から成り、第 1 層から第 5 層まで平行な層序である。塚に伴う施設や遺物は検出されなかった。



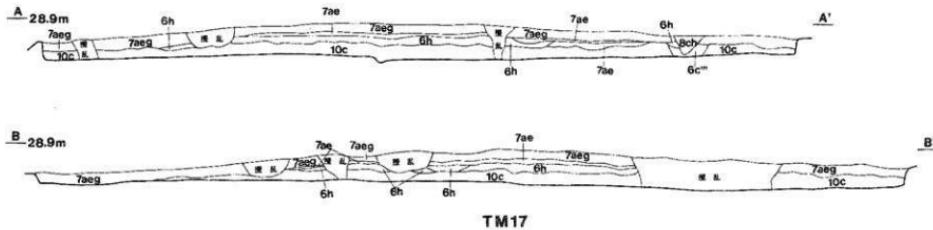
第13図 第12・14・16号塚状遺構平面図



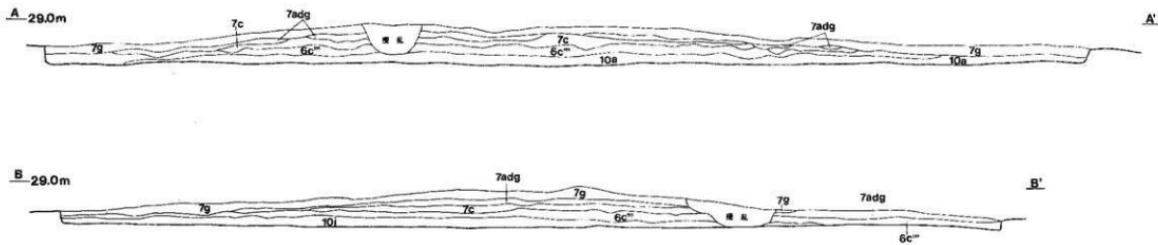
第14図 第12・14・16号塚状埴溝土層断面図



第15図 第17・21号塚状遺構平面図



TM17



TM21



第16図 第17・21号堤状遺構土層断面図

#### 第23号塚状遺構（第17・18図）

本跡は、当遺跡の南側、C 2区に位置し、東西に細長く張り出しており、平面形は楕円形を呈している。規模は長径17.0m、短径14.4m、塚高約0.5mを有し、長径方向はN-66°-Eである。土層は6層から成り、塚の南西部から縄文土器2片が出土しているが、塚に伴う遺物とは考えられない。また、第1・2層はローム粒子、炭化粒子を含み軟らかく、第3層は黒色を呈し、硬く締まっている。第4～6層は、ロームブロック、ハードロームブロックを含み、締まっている。本塚に伴う施設は検出されなかった。

#### 第24号塚状遺構（第17・18図）

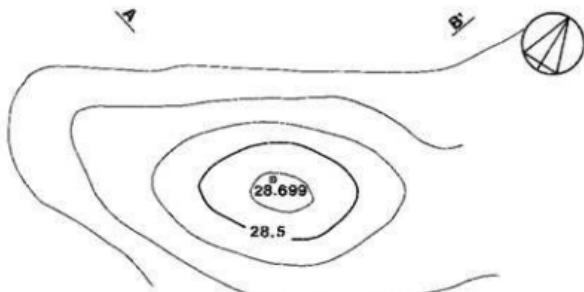
本跡は、当遺跡の南側、C 2区に位置し、平面形は楕円形を呈しており、南東方向になだらかに細長く張り出している。規模は長径20.0m、短径12.0m、塚高約0.4mを有し、長径方向はN-40°-Wである。土層は6層から成り、塚に伴う施設や遺物は検出されなかった。

#### 第25号塚状遺構（第17・18図）

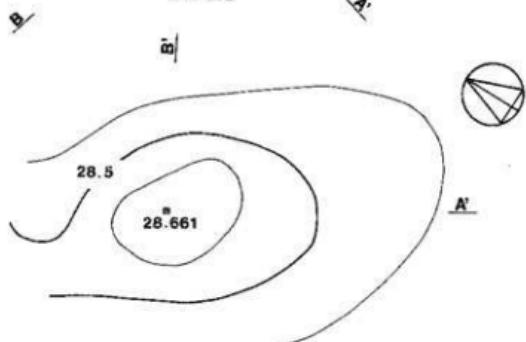
本跡は、当遺跡の北側、A 3区に位置し、塚の南側約4分の1が削り取られ、農道に使用されている。平面形状は楕円形を呈している。規模は長径22.0m、短径10.0m、塚高0.7mを有し、長径方向はN-24°-Eである。土層は4層から成り、第1、2層はローム粒子、砂粒を含み軟らかく、第3層は黒色を有し、層も厚く、締まりがある。第4層はローム粒子やロームブロックを含む褐色の土層である。



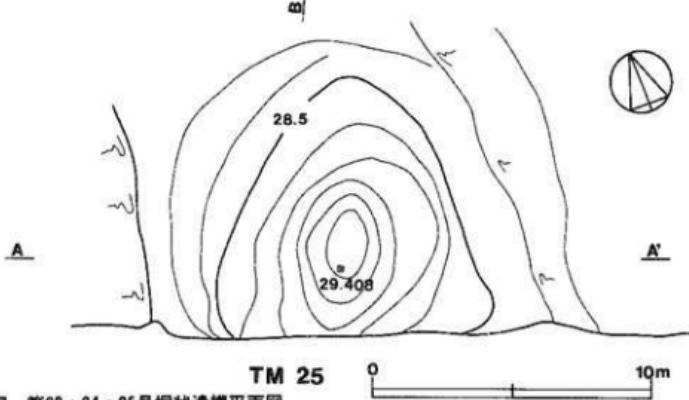
出 土 状 況



TM 23



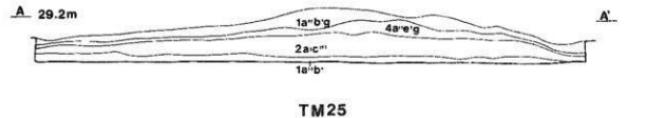
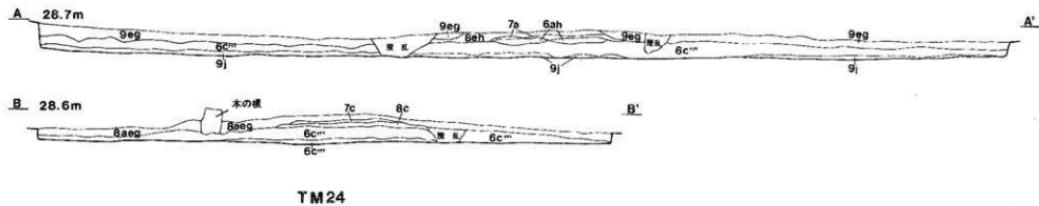
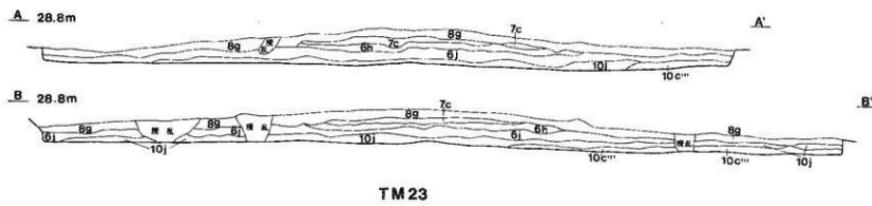
TM 24



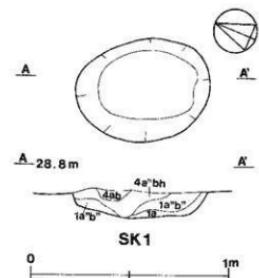
TM 25

0 10m

第17図 第23・24・25号塚状造構平面図



0 4m



第18図 第23・24・25号塚状造構土層断面図、第1号土坑平面図・土層断面図

## 2 塚状遺構出土遺物

### 第1号塚状遺構出土遺物（第17図）

1は、本塚状遺構の塚下の北東部に位置する第1号土坑から出土した指鉢である。法量は、口径19.9cm・底径10.2cm・器高7.3cmである。器形は、底部からゆるやかに内側して立ち上がり口唇部に至る。口唇部は、内面・外面の横なで整形により丸身のある盛り上がりを呈している。口唇部の1部には微かに自然釉がかかっている。口縁外部は横なでが行われ2本の平行した凹線が施され、下部は折り返しによる凸状帶が施されている。凸状帶下部と胴部の境をヘラ状工具により凹線が施され、胴部外面全体は横なでをしている。底部外面はかなり摩耗している。口縁部内面と口縁部内面の境は、太い凹線が施されており、口縁内面は、櫛齒状工具による縱の沈線が横なでにより磨消されている。胴部から底部にかけては、全体を櫛齒状工具により縱の沈線が施されている。櫛齒状の沈線は、上から下に引かれ胴部と底部の境で明瞭に止められている。底部内面は、滑らかで円形を呈し、中央に櫛齒状工具による沈線が交差して施されている。胴部外面全体には、微量ではあるが朱が付着している。胎土は、石英・砂粒が目立つ。色調は、外面とも赤褐色を呈している。

2は、本跡北東部第4～5層から出土した宝瓶印塔の相輪部で、円筒形を呈し、全体的に摩減している。石質は、雲母・黒雲母・石英を含む花崗岩で造られている。法量は、全長39.6cm・底径15.7cm・重量12.65kgを有している。宝珠は、直径11.8cm・高さ5.9cmの半球形を呈し、竜舎との間を直径11.3cmの凹状の輪が刻されている。竜舎は、直径12.8cm・幅4.2cmの凸状の輪を呈している。擦管は、直径10.8cm・幅4.0cmの凹状の輪を呈している。相輪は、凸状を呈する輪が第1輪から第5輪を輪と輪の境を凹状に刻されている。第1輪の直径は13.9cm・第5輪の直径は12.5cmをはかる。輪が上部に進むにつれて微かではあるが小さくなっている。請花は、直径15.7cm・幅6.0cmを有する凸状の輪を呈し、8枚の開花状花弁が凹状の線により刻されている。請花と伏鉢の間は、凹状線刻により区別している。伏鉢は、直径15.7cm・幅6.0cmの凸状の輪を呈している。伏鉢底部中央には、直径4.5cmの円形を呈する凸状を有し、この凸状部は、相輪と笠部の露盤とを接続するためのものと思われる。

3は、本跡北西部5層から出土した、黒雲母・石英を多量に含む花崗岩片である。法量は、長さ27.6cm・幅10.6cm・長さ6.0cm・重量2.85kgである。石片には、上部と思われる所に縫6.0cm・横3.0cmの四角形を呈する人為的な加工痕と思われる1cmの深さの凹を有する。また、その3cm左右（上下）にも同様の痕跡を有する。形状や大きさは不明であるが、原形は更に大きなものであったと思われる。

4は、本跡北東部5層から出土した、石英・黒雲母を多量に含む花崗岩で造られた四角形を呈

する宝篋印塔の基礎部の一部と思われる。法量は、全長14.5cm・一辺が8.4cm・高さ8.0cm・重量2.1kgである。石片頂部は平らで、長方形状を呈し、周囲の角は摩耗して丸みをおびている。石片は、更に下方向に延びていたものと思われる。

5～7は、本塚から出土した古銭である。5は、寛永通寶の中でも岡山錢と称され、寛永13年に铸造されたもので、古寛永通寶の部に入る。法量は、外縁外径2.1cm・外縁厚0.1cm・内郭外長0.7cm・重量1.95gである。材質は銅で、表・裏面全体に緑青が付着している。6は、寛永通寶である。法量は、外縁外径2.3cm・外縁厚0.1cm・内郭外長0.8cm・重量2.15gである。材質は銅で、表・裏面全体に緑青が付着している。7は、寛永通寶である。法量は、外縁外径2.3cm・外縁厚0.11cm・内郭外長0.9cm・重量2.90gである。材質は鉄である。鉄錢と称される。

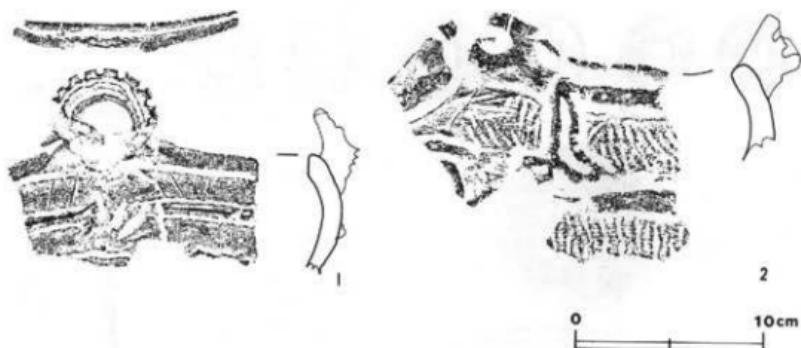
### 3 その他の遺物（第20図）

当遺跡は、15基の塚状遺構について発掘調査を実施したが、塚状遺構に直接的に伴わない遺物が少量出土している。それらの遺物は、主に縄文土器片で資料の重要性を考えて掲載する。

1は、第23号塚状遺構の南西の裾部から出土した縄文土器片である。出土状況は、第2層から外面を上向きの状態で、2片が隣接して出土している。接合された土器片は、扇状の把手の付いた口縁部で、把手の周辺には、棒状工具による圧痕文が施され、内側は同様の工具による連続刺突文が2本施されている。口唇部下には、断面三角形の隆帯が貼り付けられ、その上下には同様の連続刺突文が施されている。口唇部内面には、横方向の整形痕が見られる。胎土は雲母・長石・石英及び砂粒を含んでいる。土器片は、縄文時代中期中葉の阿玉台1b式期のものと推定される。

2は、第16号塚状遺構の北西の裾部から出土した縄文土器片である。出土状況は、塚状遺構の第3層（黒色土層）の下部から、それぞれ30cm以内の範囲に土器の口縁部3片が、外面を上向きにして出土している。これらは同一個体のもので、接合された土器片は波状を呈する口縁部であり、波状部には太い沈線による渦巻文が施されている。口唇部は、内面・外面の整形により彼線状に尖っている。

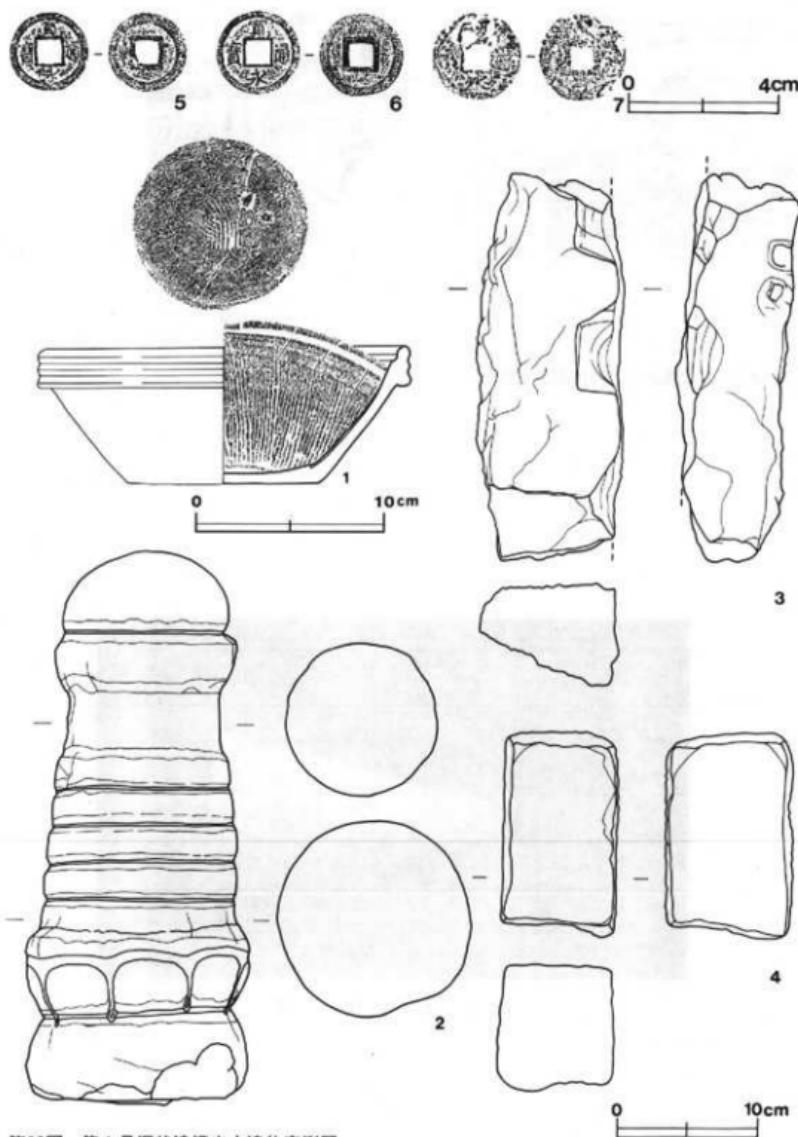
なお、外面は浅く凹んでいる。口縁部にはR.L.の縄文が施され、直線及び曲線状の区画を呈する隆帯を貼り付け、隆帯上及び両側は、棒状工具による沈線が施されている。胎土は砂粒・長石を含んでいる。土器片は縄文時代中期後葉の加曾利E式期のものと推定される。



第19図 大久保A遺跡内出土遺物拓影図



出土状況



第20図 第1号塚状遺構出土遺物実測図

### 第3節 まとめ

大久保A遺跡には、高さ70cm以上の塚状を呈するマウンド15基が確認されている。地元の人達の間では、古くから中世の武将の墓ではないかと言われていた。遺跡から東方約1.5kmには、ゴクモン、あるいは首切り場等の地名があり、大久保A遺跡の塚状を呈するマウンドとは何らかの関係があると思われていた。調査の結果、塚状マウンドは、次のような共通点を有していた。土層は6~7層からなり、層序や含有物、縫まり具合等が同様であり、塚の第3~4層は、標高28.50m前後に位置する黒色の土層を有する等々。これらの事から当遺跡の塚状遺構は、自然の地形を利用したものと考えられる。塚状遺構の成り立ちの過程には、次のようなことが考えられる。当大穂町は、西は小貝川、東は桜川に挟まれ、中を西谷田川、東谷田川が流下している。これらの河川の氾濫により凸凹地が生じ、塚状マウンドが形成されたのではないかと思われる。この事は、黒色層より上部の土層全体に砂粒が混入していることからも考えられる。この事から第1号塚状遺構は、自然に形成されたマウンドを利用し、宝鏡印塔建造や稻荷を祭ったものと思われる。石造の宝鏡印塔で最古の名をもつと言われているものは、宝治二年（1248年）といわれているので、第1号塚状遺構の利用は、それ以後のものと思われる。相輪部からは紀元銘を知る手がかりは検出されなかった。また、第1号土坑から出土した擂鉢は、内部の縦の沈線から想定すると沈線が密に入っており、中世の擂鉢では無いと思われる。使用目的は不明である。宝鏡印塔に伴う「納骨」あるいは「納経」の器とも考えられるが、出土状況は上向きになっており、それに伴う巻等が無いことや、古い擂鉢とは思われない事等から、その可能性は少ないと思われる。また、出土した古銭は寛永通寶であり、古寛永通寶の部に入る通称岡山銭が含まれていた。岡山銭は寛永13年に鋳造されたもので、江戸時代初期に当たる。

第1号塚状遺構は、明治初期まで稻荷（P.L.20写真参照）が祭られていたと言われており、現在、稻荷は大砂地区の八幡神社境内に移転されている。出土した古銭は、稻荷に伴う賽銭ではないかとも思われる。このことから第1号塚状遺構は、「宝鏡印塔」と「稻荷」との関係が生じているわけである。宝鏡印塔の使用目的は次の2つの方法があると言われている。1は、「宝鏡印陀羅尼經」を納めた供養塔として、2は、身分の高貴な人物の墓としてである。ここで考えられることは、擾乱層の下部から相輪が出土している事から、擾乱により埋められたものと思われる。したがって、宝鏡印塔を建造してから何年か後に宝鏡印塔を取り除き、稻荷が祭られたものと思われ、時代を異にして、供養塚と稻荷塚の2つの性格を有していたものと考えられる。

なお、古老の話によると、本塚には稻荷が祭られ、参道があったと言われている。地籍番号では、大久保210番地に当り、本塚とその参道と思われる幅約6.0m・長さ80mの東西に細長い地割が確認されている。

## 大久保 A 遺跡・大久保 B 遺跡の環状遺構一覧表

環番号	位置	長径方向	平面形	規		出土遺物	備考
				長径×短径	塚頂レベル		
TM 1	B 5	N-82°-W	不整橢円形	33.0×18.6	29.665	0.94	擂鉋・臼輪・石6個・古銭3枚
TM 4	B 4	N-45°-W	橢円形	12.2×11.0	28.823	0.50	
TM 5	A 4	N-30°-W	橢円形	12.0×11.0	29.302	0.75	
TM 6	B 4	N-31°-W	橢円形	20.4×19.4	29.357	1.0	
TM 7	B 4	N-82°-W	橢円形	12.6×10.2	28.969	0.57	
TM 9	A 4	N-62°-W	橢円形	14.0×6.0	28.965	0.64	
TM 10	A 3	N-60°-W	橢円形	14.8×14.0	28.585	0.40	
TM 12	B 3	N-89°-E	ほぼ円形	16.4×16.2	29.098	0.58	
TM 14	B 4	N-84°-E	不整橢円形	14.8×12.0	28.969	0.56	
TM 16	B 3	N-22°-W	ほぼ円形	11.0×10.6	29.246	0.87	縄文土器3片 出土遺物は直接縁とは無関係
TM 17	B 3	N-13°-E	橢円形	18.0×16.0	28.737	0.52	
TM 21	C 3	N-71°-W	橢円形	22.4×20.0	29.055	0.60	
TM 23	C 2	N-66°-E	橢円形	17.0×14.4	28.699	0.46	縄文土器2片 出土遺物は直接縁とは無関係
TM 24	C 2	N-40°-W	橢円形	20.0×12.0	28.661	0.36	
TM 25	A 3	N-24°-E	橢円形	22.0×10.0	29.408	0.72	
愛宕塚	B 4	N-28°-W	隅丸方形	23.4×22.0	30.570	2.28	石片5個・古銭1枚 塚4分の3遺存

①直接と短径の差が1割以上を橢円形とした。②長径と短径の差が1割以内を円形とした。

## 第4章 大久保B遺跡

### 第1節 遺跡の概要と遺構・遺物の記載方法

#### 1 遺跡の概要

大久保B遺跡は、筑波郡大穂町大字大砂字大久保264番地ほか11筆に所在し、調査対象面積は15,337m<sup>2</sup>である。当遺跡は、大久保A遺跡から南方0.3kmに位置し、遺跡の周囲の環境は、大久保A遺跡と同様で、低湿地に面する微高地に所在する。現況は、塚の周辺が山林であり他は芝畠である。遺跡内には、直径22.00m・高さ2.28mの愛宕塚が所在し、発掘調査前の芝畠の表面には、微量ではあるが、縄文土器片、土師器片、須恵器片が散布していた。遺構の有無を確認するため、調査対象総面積の4分の1に当たる小調査区を発掘し、遺構の確認をしたが、愛宕塚以外に遺構と思われるものは検出することができなかった。地表面から遺構確認面までの深さは、0.3~0.5mであるのに対し、調査区の約15%に当たる南西側は、低湿地特有のヘドロ状の黒色土であった。遺物は、愛宕塚から石片5個、古銭1枚、その他、調査区全域から縄文土器片、土師質土器片等が出上している。以上のようなことから、当遺跡では、愛宕塚についてのみ記述することにした。

#### 2 遺構・遺物の記載方法

当遺跡における遺構・遺物の記載方法は、大久保A遺跡の記載方法と同じであるので、第3章第1節の2を参照されたい。

### 第2節 愛宕塚と出土遺物

#### 1 愛宕塚（第22図）

本塚は、大久保B遺跡の北東部隅に所在し、平面形はほぼ方形を呈している。規模は、長径23.4m・短径22.0m・塚高は約2.28mで、長径方向はN-28°-Wである。塚頂上部は、ほぼ平坦で東西にやや長い隅丸長方形を呈し、直徑1.5~3.0mの抜根跡とも盜掘跡とも思われる凹が3ヵ所確認されている。塚南側は、裾部から頂部に向かって、幅6.0m・奥行5.0m程の三角状に上取り跡がある。北西から北東にかけては、橢円形状に盛土が削り取られている。更に、北東から南に向かっては塚の東側裾部をやや直線状に盛土が削り取られている。盛土断面の最大の厚さは2.28mを有し、旧表土上に人為的に盛土し塚を構築したものと思われる。土層は南北ラインの北部中央寄りに擾乱の跡がみられるが、他はしっかりとおり、かなり細かく分けることができ、

人為的盛土の跡がみられる。土層断面を上部層・中部層・下部層に区別すると、上部層は第1～4層にあたり、第1層は、0.4m前後の厚さを有し、塚の表土全面を覆い、腐植土が多く、ふかふかしている。第2～4層は、炭化粒子・ローム粒子・ローム小ブロック・ローム中ブロック・焼土粒子を含み、縮まりがなく、褐色土である。中部層は第5～7層で含有物は上部層と同様であるが、やや縮まりがある褐色及び暗褐色土である。下部層は第8～12層でローム粒子・炭化粒子・ハードロームブロックを含み、粘性及び縮まりのある褐色土である。第13～18層は断面全体に散っており、褐色または暗褐色土である。

出土遺物は、塚の南東部第2層から石片3個、北西部第1層から第2層にかけて花崗岩で造られた土台石状の石1個と、祠の一部と思われる石片1個、古銭1枚、燈明皿1枚が出土している。

調査の結果、本塚からは埋納施設や塚下のローム層からは塚に伴う施設は検出されなかった。なお、本塚には、愛宕様と言われる火伏の神が祭られ、参道があったと言われておらず、地籍図をみると塚の西側の裾部から、道路まで直線的に幅約8.0m・長さ約40mの細長く地割されている栗畠が確認されている。

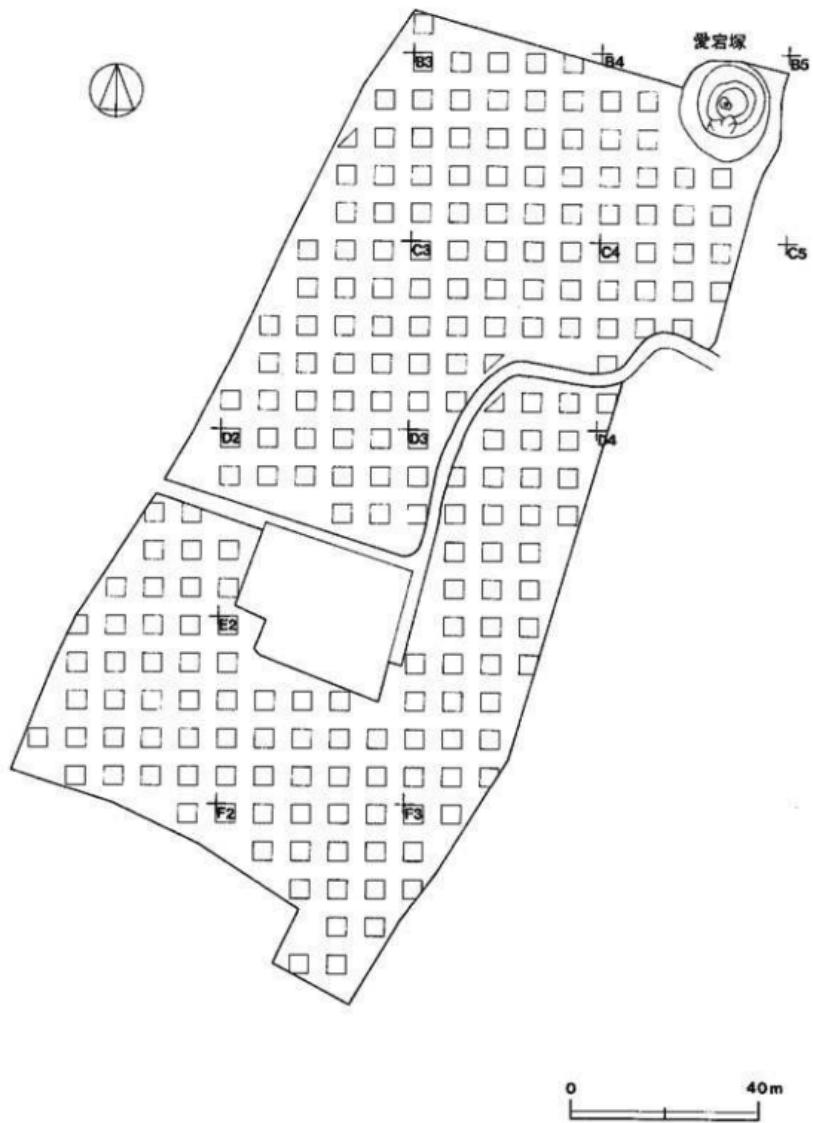
## 2 愛宕塚出土遺物（第23図）

1は、土師質の燈明皿で、口径6.65cm・底径4.7cm・器高1.1cmを有している。底部は回転糸切りの平底で、体部は外傾して短かく立ち上がる。

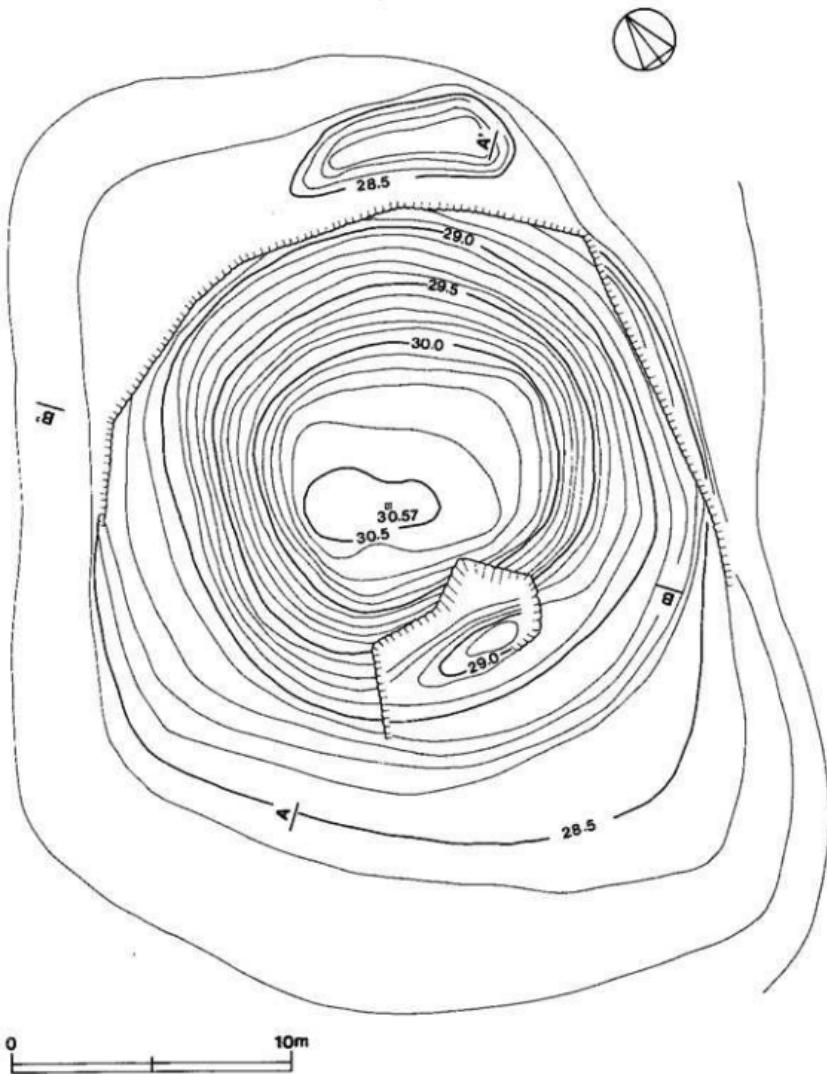
2は、塚の北西部第2層から出土した土台状を呈する石片である。石質は、花崗岩で雲母、黒雲母、石英が含まれている。表面はやや凸凹しているが、中央部及びその両側10～11cmに幅4.5cm前後、長さ2～4cmに渡り、平らに削られた痕跡が確認される。両端はやや垂直に切られ、平面は平らである。

3は、塚の南西部第2層から出土した四角形を呈する石造りの祠に伴うものと思われる石の一部である。石質は花崗岩で雲母、黒雲母、石英が含まれている。法量は、横幅が8.5cm、縦幅が6.6cmで、長さ7.2cm・重量538gを有する。角は磨耗し、やや丸みをおびている。

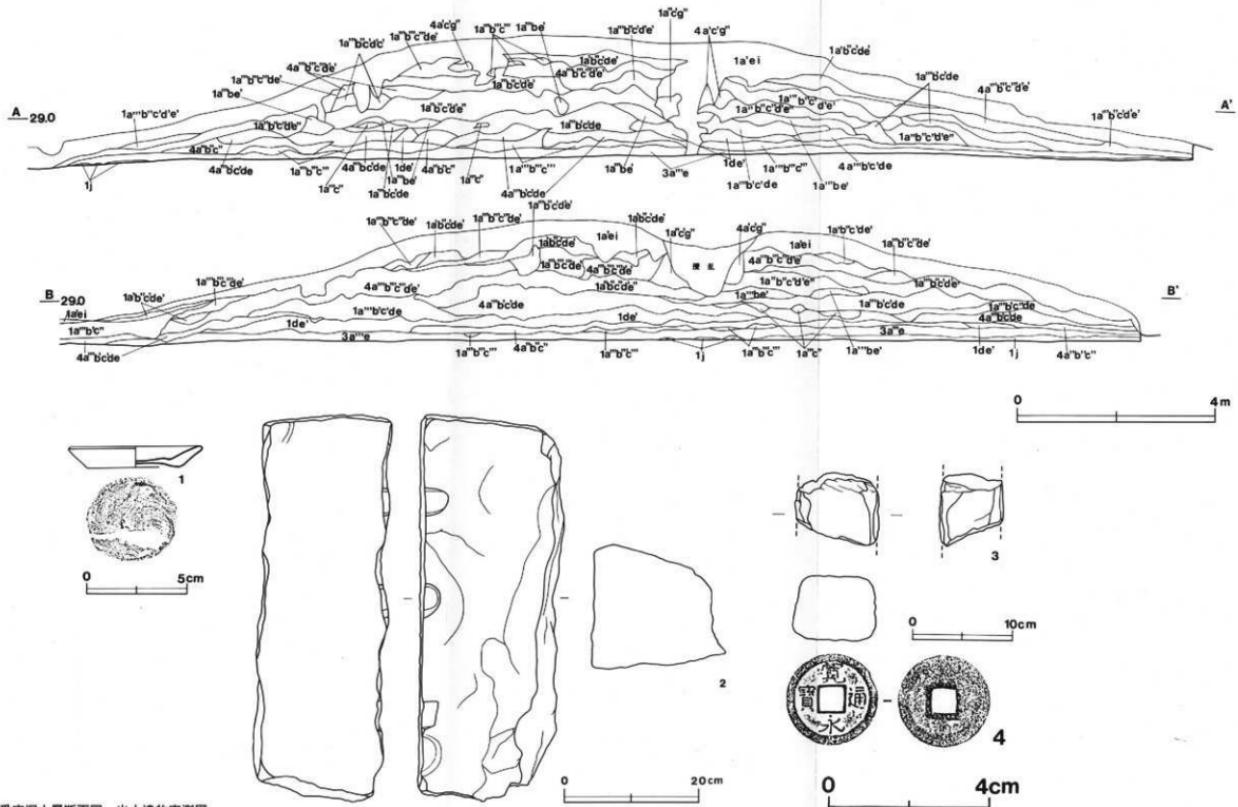
4は、塚の北西部第2層から出土した寛永通寶である。法量は外縁外径2.3cm・内郭外長0.7cm・外縁厚0.1cm・重量2.0gである。遺存状況が良好で、文字が鮮明に浮き出ている。材質は銅で、表・裏面の全体に緑青が付着している。



第21図 大久保日遺跡全体図



第22図 愛宕塚平面図

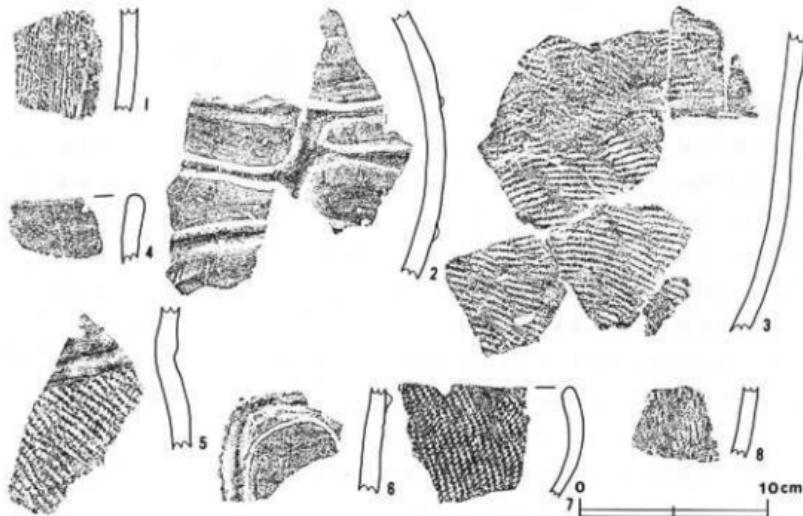


### 第23図 愛宕塚土層断面図・出土遺物実測図

### 3 その他の遺物(第24図)

ここに取り上げた遺物は、愛宕塚を除く調査区全域から出土した縄文土器片であるが、当遺跡にとっては貴重な遺物なので掲載することにした。

1は、胴部片で撚糸文が施されている。2は、胴部片で微隆起線によるモチーフが描かれている。3は、深鉢形土器の胴部片で、縄文が施されている。4は、口縁部片である。5は、胴部片で、上部は横方向にナゾリが施され、以下縄文が施されている。6は、胴部片で微隆起線による曲線的モチーフが描かれ、その内側に添って沈線が施されている。7は、口縁部片で、縄文が施されている。8は、胴部片で、縄文が施され、胎土には纖維の混入がみられる。



第24図 大久保B遺跡内出土遺物拓影図

### 第3節 まとめ

大久保B遺跡には、愛宕塚と称されている塚が所在し、発掘調査前には古墳ではないだろうかとの見方をしていたが、発掘調査を進めるに従い、古墳の前提となるべき墓としての埋葬施設やそれに伴う遺物が検出されず、塚としての性格が強まった。地元の占老の話によると、明治の初め頃まで愛宕様と称する火伏の神を祭った、石造りの祠があったと言われている。その祠は、現在、大久保B遺跡の稲荷と同様、神寄せにより大砂地区の八幡神社境内に移転され、本塚と同様に盛土して塚造り、その頂部に祭られている。(P.L.20を参照) なお、祠からは、紀年銘を検出することはできず、いつ頃建造されたのか不明である。愛宕塚から出土した石片5個は、祠の石質と同じなので祠に伴う遺物であると思われるが、時期を解明する手がかりにはならなかった。古銭は、寛永通寶で、江戸時代のものであるが、賽銭として使われたものではないかと思われる。

明治5年の大砂村、村控帳(大穂町役場蔵)によると、当時の大砂村には、神社1、寺1、僧1と記されているが、愛宕塚についての記録はないので、限られた地域の人の手によって構築され祭られていたのではないかと思われる。

### 終章 むすび

筑波研究学園都市計画大砂工業団地造成事業地内における大久保A遺跡、大久保B遺跡の埋蔵文化財の発掘調査を、昭和60年8月1日から同年12月31日まで実施した。本書は、その調査の成果についてまとめたものである。この2遺跡の塚からは、これまで述べてきたように、中世から近世における地域の人達の信仰を中心とする遺構、遺物が検出されている。両遺跡の塚は、同時に存在した時期もあり、性格も信仰を対象とした類似性が認められ、大砂地区における人々の生活の一部を解明する上での貴重な資料を得ることができたものと思われる。

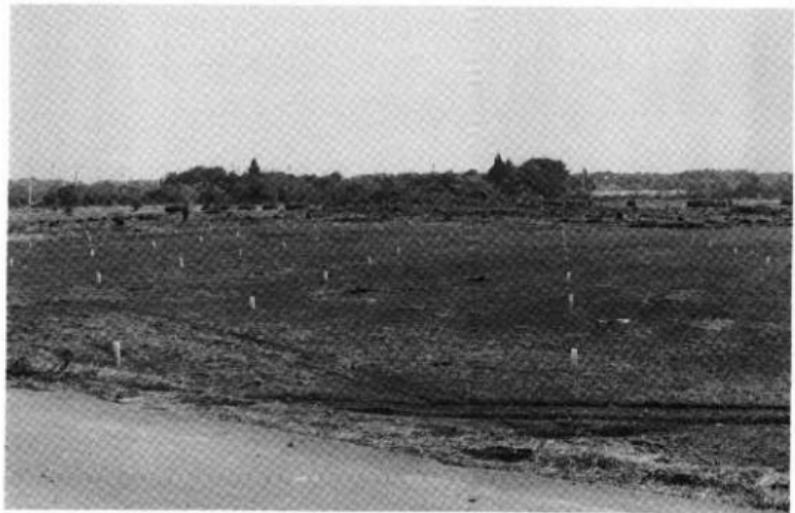
明治5年の大砂村、村控帳には、大久保A遺跡の稲荷及び大久保B遺跡の愛宕塚については、何も記されていないが、この地域の人達は、稲荷は、経済的に生活を豊かにする神として、愛宕様は、火による災害から生活を守るために、両様にそれぞれを祭り信仰したものと思われる。

なお、この調査結果をまとめるにあたって、関係各位の御指導や御協力があったことに対して、文末ではあるが、心から感謝の意を表したい。

# 写 真 図 版



大久保 A 遺跡発掘前全景



大久保 B 遺跡発掘前全景



第1号塚状遺構発掘前全景



第1号塚状遺構土層断面



第4号塚状遺構発掘前全景



第4号塚状遺構土層断面



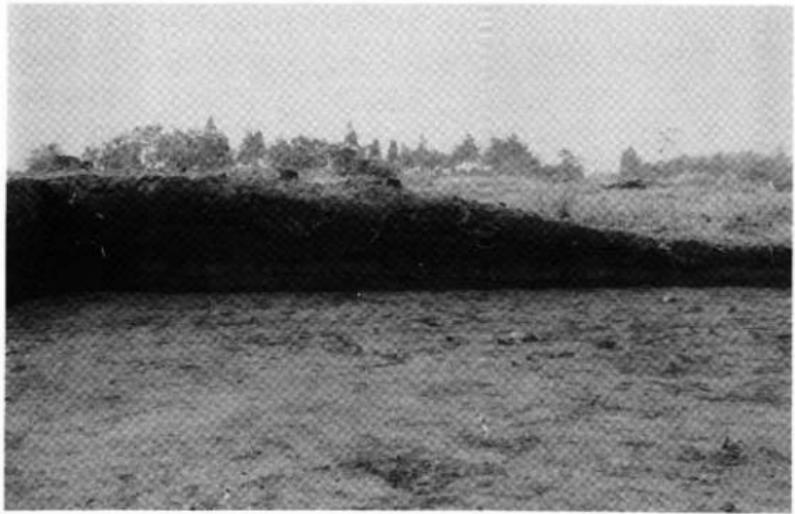
第5号壕状遗構発掘前全景



第5号壕状遺構土層断面



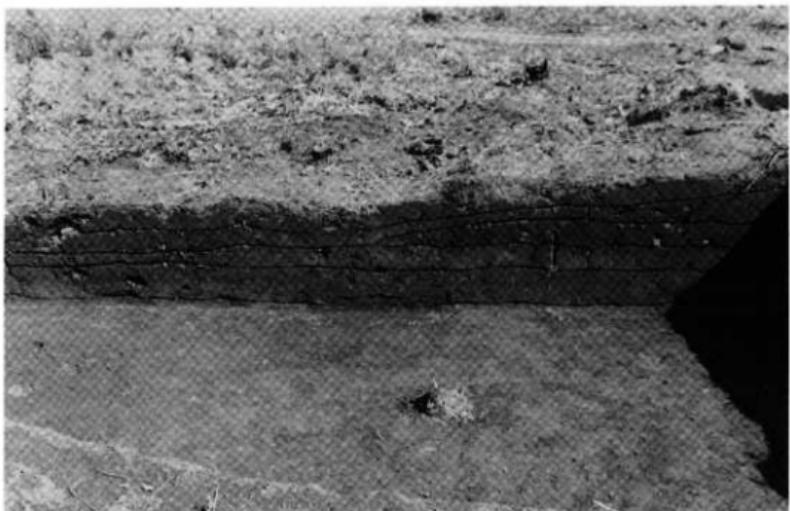
第 6 号塚状造構発掘前全景



第 6 号塚造構土層断面



第7号塚状造構発掘前全景



第7号塚状造構土層断面



第9号塚状遺構発掘前全景



第9号塚状遺構土層断面



第10号塚状遺構発掘前全景



第10号塚状遺構土層断面



第12号塚状遺構発掘前全景



第12号塚状遺構土層断面



第14号塚状遺構発掘前全景



第14号塚状遺構土層断面



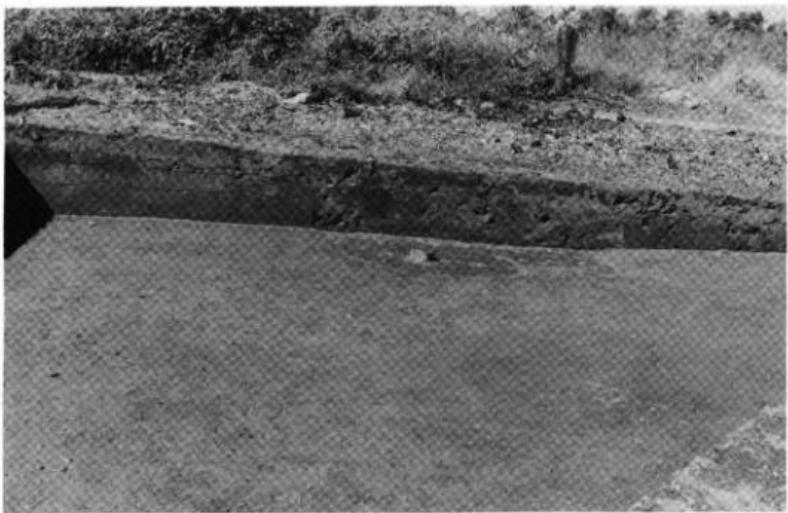
第16号塚状造構発掘前全景



第16号塚状造構土層断面



第17号塚状遺構発掘前全景



第17号塚状遺構土層断面



第21号塚状遺構発掘前全景



第21号塚状遺構土層断面



第23号塚状遺構発掘前全景



第23号塚状遺構土層断面



第24号塚状造構発掘前全景



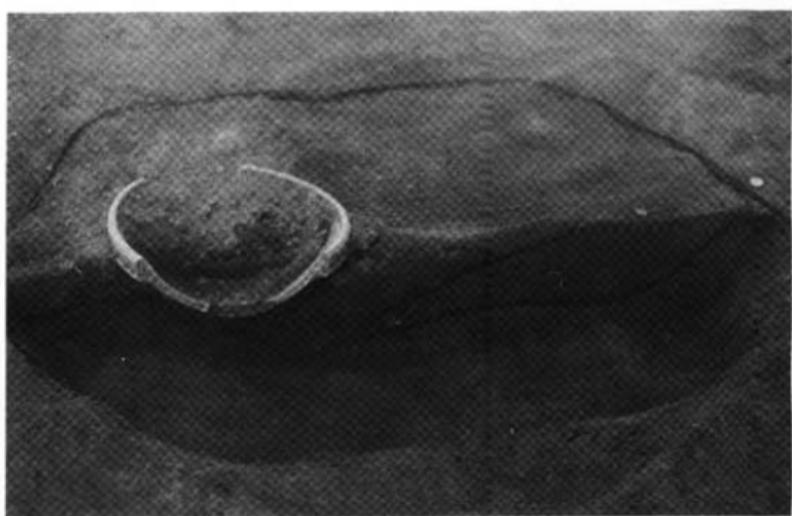
第24号塚状造構土層断面



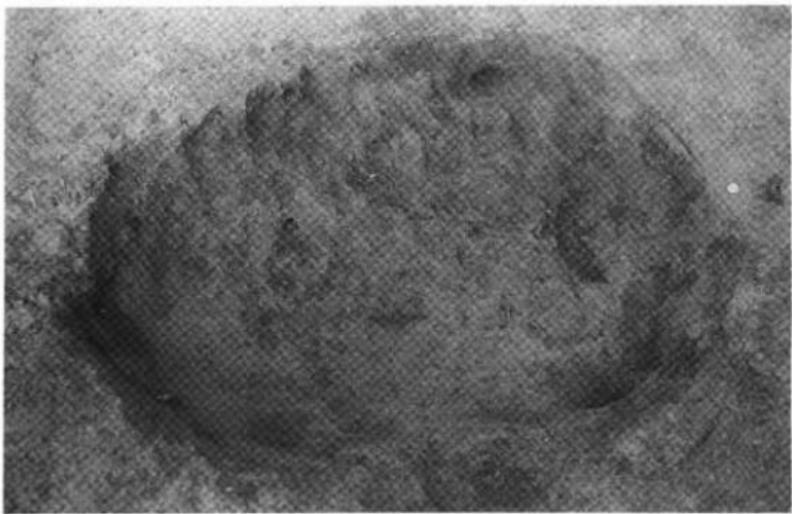
第25号塚状造構発掘前全景



第25号塚状造構土層断面



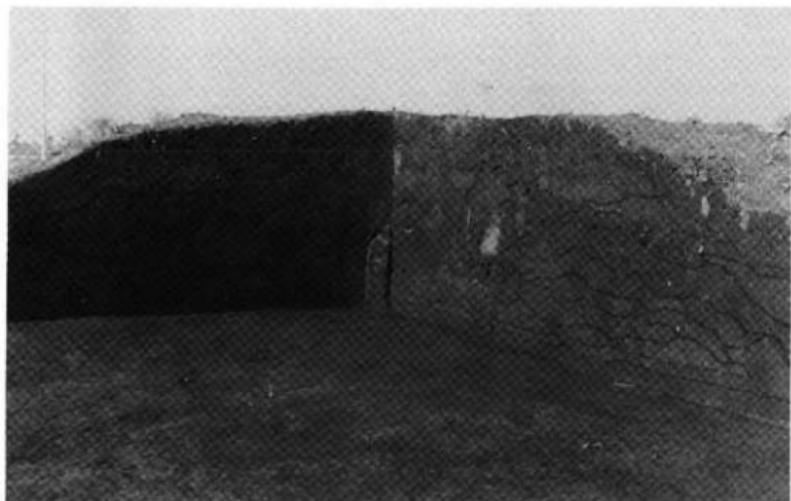
第1号土坑土层断面



第1号土坑宪掘



愛宕塚発掘前全景



愛宕塚土層断面



大久保 A 遺跡第 1 号塚状造構出土遺物



大久保 B 遺跡愛宕塚出土遺物



大砂八幡神社境内に移転した稻荷



大砂八幡神社境内に移転した祠

茨城県教育財團文化財調査報告第37集

研究学園都市計画大砂工業団地造成事業地内埋蔵文化財調査報告書

大久保A遺跡

大久保B遺跡

昭和61年3月31日印刷

昭和61年3月31日発行

発行 財團法人 茨城県教育財團  
水戸市南町3丁目4番57号  
印 刷 有限会社 三栄印刷  
水戸市赤塚1丁目2010-1